

平安京右京三条二坊十四町跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇〇六一

平安京右京三条二坊十四町跡

2006 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京三条二坊十四町跡

2006 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じ広く公開することで、市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用を図っていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ規模の違いはありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび共同住宅新築工事に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

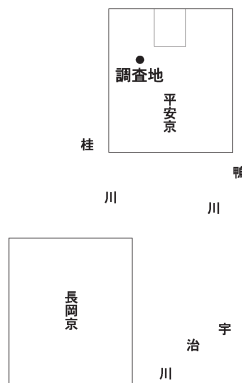
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成 18 年 6 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名 | 平安京右京三条二坊十四町跡 |
| 2 調査所在地 | 京都市中京区西ノ京下合町 20・21・22 番地 |
| 3 委 託 者 | 株式会社穴吹工務店 代表取締役 穴吹英隆 |
| 4 調査期間 | 2006年2月10日～2006年4月1日 |
| 5 調査面積 | 489 m ² |
| 6 調査担当者 | 布川豊治 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「山ノ内」「壬生」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 日本測地系（改正前）平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。 |
| 11 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 12 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。 |
| 13 遺物番号 | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。 |
| 14 掲載写真 | 村井伸也・幸明綾子・担当職員 |
| 15 遺物復元 | 村上 勉・出水みゆき |
| 16 基準点測量 | 宮原健吾 |
| 17 本書作成 | 布川豊治 |
| 18 編集・調整 | 児玉光世 |



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
2. 周辺の調査	2
3. 遺 構	4
(1) 基本層序	4
(2) 遺構	5
4. 遺 物	13
(1) 土器類	13
(2) 瓦類	18
(3) 石製品	18
(4) 木製品	19
(5) 金属製品	21
(6) その他の遺物	21
5. ま と め	22

図 版 目 次

図版1	遺構	1	調査区全景（北東から）
		2	柱穴 28 断割り（北西から）
		3	野寺小路西側溝（北から）
図版2	遺構	1	井戸 35 新段階（南から）
		2	井戸 35 断割り（南から）
		3	井戸 35 掘形西側断割り（南から）
図版3	遺構	1	野寺小路川跡（北から）
		2	野寺小路川跡（南東から）
図版4	遺構	1	セクション断面（北から）
		2	水利施設 50（北東から）
図版5	遺構	1	シガラミと杭、堤の基礎材の石（北西から）
		2	木杭と竹杭および卒塔婆出土状況（南東から）
		3	侵食された西岸と東岸際の集石 52（南から）
図版6	遺物	土器類	

挿 図 目 次

図1	調査区配置図（1：1,000）	1
図2	調査前全景（東から）	1
図3	調査風景（南東から）	1
図4	調査地と周辺の調査位置図（1：5,000）	2
図5	遺構実測図（1：200）	4
図6	井戸35実測図（1：40）	6
図7	柱穴28実測図（1：40）	6
図8	セクション断面図（1：50）	7
図9	杭列を覆う土層（北から）	9
図10	基礎材の大礫と周辺の混砂礫粘質土（北東から）	9
図11	水利施設50実測図と復元概念図（1：40、1：80）	10
図12	調査区東部南壁断面図（1：50）	11
図13	基礎材の大礫部分と杭列実測図（1：40）	12
図14	基礎材の大礫部分の断割り（南東から）	12
図15	杭列の断割り（北東から）	12
図16	出土土器実測図（1：4）	14
図17	軒瓦拓影・実測図（1：4）	18
図18	ナイフ形石器実測図（1：2）	18
図19	砥石実測図（1：4）	19
図20	水利施設50出土木杭	19
図21	木製品実測図（1：4）	20
図22	鉄釘実測図（1：4）	21
図23	銅製飾り金具実測図（1：2）	21
図24	銅製飾り金具	21
図25	遺構変遷概要図（1：400）	22
図26	1989年度調査と今回調査断面図（1：100）	23
図27	主要遺構配置図（1：500）	24

表 目 次

表1	周辺の調査一覧表	3
表2	遺構概要表	5
表3	遺物概要表	13

平安京右京三条二坊十四町跡

1. 調査経過

調査地は、京都市中京区西ノ京下合町 20・21・22 番地に所在する。当地において共同住宅「(仮称)サーパス御池西大路通」の新築工事が計画され、建設に先立ち京都市埋蔵文化財調査センターが試掘調査を行った。その結果、遺構が検出され、同センターの指導により発掘調査を実施することとなり、(財)京都市埋蔵文化財研究所が調査を担当することとなった。

発掘調査の実施にあたって、敷地北半部を中心に、南北約 25 m、東西約 23 m の北西隅を残した逆 L 字状の調査区(約 489 m²)を設定し、2006 年 2 月 10 日から調査を開始した。機械掘削により盛土、耕土、中世から近世の耕作地関連と考える整地土の掘り下げを進め、遺構面を検出した。この遺構面において室町時代以降の土取土壌や、平安時代から鎌倉時代頃の南北溝・井戸・南北の川跡などを検出し、これらの遺構群の調査を進め、3 月 25 日に全景写真撮影を行い、4 月 1 日には埋め戻しを終え、すべての調査を終了した。

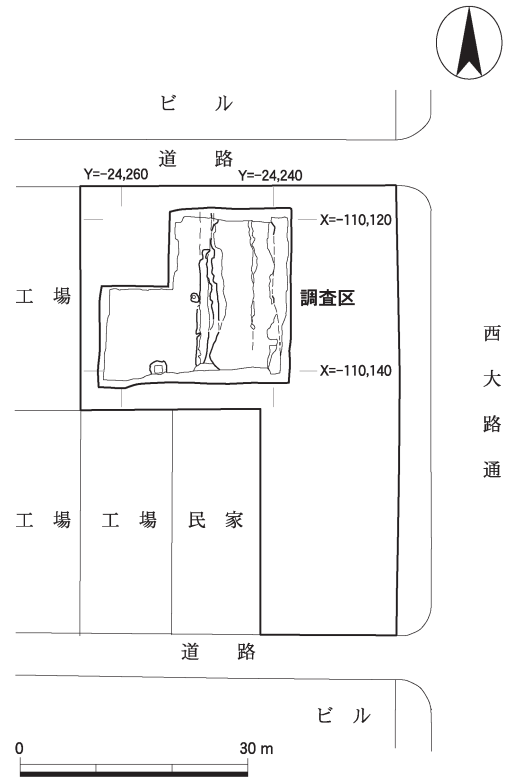


図1 調査区配置図(1:1,000)



図2 調査前全景(東から)



図3 調査風景(南東から)

2. 周辺の調査

調査地は、平安京右京三条二坊十四町の東辺南半にあたる東一行、北五・六門および同町東辺を南北にはしる野寺小路を含む地区に位置する。調査地周辺地域では、当研究所が行った調査を主とする数多くの発掘調査（図4・表1参照）¹⁾が実施されており、数々の調査成果が報告されている。

三条二坊十四町北西部の調査（図4-12）では、平安時代前期から中期にわたる宅地跡などが検出されている。調査地北西隣における十四町の調査（11）では、平安時代前期の建物や区画施設の柱穴列などが検出されている。調査地北隣における十一・十四町の調査（8）では、三条坊門小路南側溝、野寺小路東西両側溝、野寺小路内におさまり南北に流れる川跡（野寺小路川跡²⁾）などが検出されている。さらに野寺小路川跡は、十五・十六町の調査（18）や十五町の調査（14）でも検出されており、野寺小路は平安時代後期には路面部分が南流する流路となって、鎌倉時代から室町時代初頭頃までには、その流路は埋没し、その姿が失われたことが判明している。

これら既調査の成果から、当調査地においても、十四町内に位置する平安時代の宅地関連遺構や、野寺小路関連遺構および路面部分に形成された野寺小路川跡などの検出が予想された。

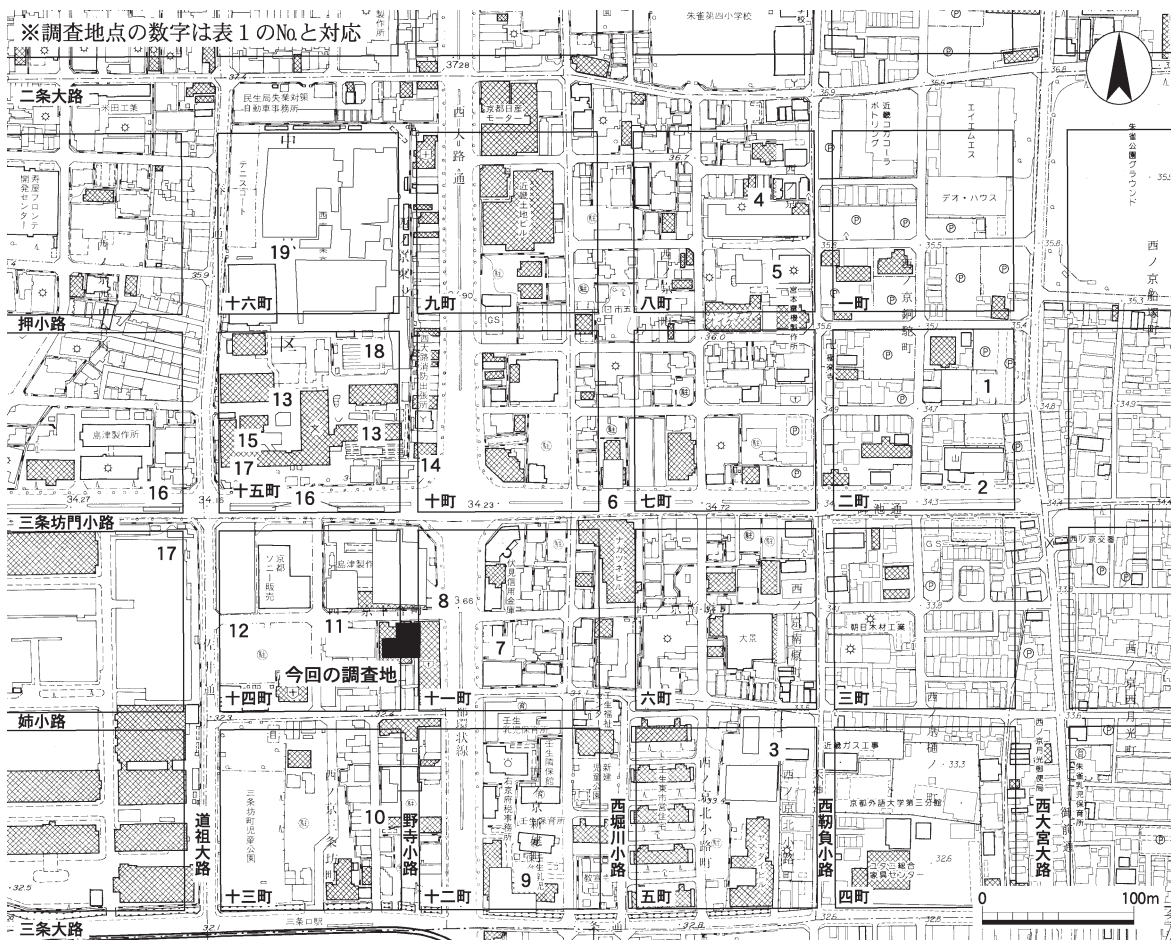


図4 調査地と周辺の調査位置図（1：5,000）

表1 周辺の調査一覧表

No.	調査地区	所在地 (中京区西ノ京)	調査期間	調査概要	文 献
1	二町	銅駝町68	2003.8.1～ 2003.9.10	平安時代の建物1棟、泉、溝、土 壙、ピットなどを検出。	近藤知子「平安京右京三条二坊二町」『京都市 内遺跡発掘調査概報 平成15年度』京都市文 化市民局 2004年
2	二町	銅駝町76	1981.10.21～ 1981.11.20	平安時代の建物3棟、井戸1基、 溝2条、柵1条などを検出。	平尾政幸「平安京右京三条二坊」『平安京跡発 掘調査概報 昭和56年度』京都市文化観光局 1982年
3	五町	北小路町4他	1985.4.15～ 1986.8.14	姉小路南側溝、平安時代の建物7 棟、柵4条、井戸1基、溝5条を 検出。	平尾政幸、他「平安京右京三条二坊」『昭和60 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市 埋蔵文化財研究所 1988年
4	八町	原町97	1986.12.8～ 1987.3.23	平安時代の建物1棟、井戸2基、 溝1条、園池の一部、川などを検 出。	堀内明博、他「平安京右京三条二坊」『昭和61 年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市 埋蔵文化財研究所 1989年
5	八町	原町99	1990.3.15～ 1990.5.11	4の調査に連続する園池の一部、 柱穴などを検出。	辻 裕司「平安京右京三条二坊1」『平成元年 度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵 文化財研究所 1994年
6	西堀川小路	原町64	1982.6.17～ 1982.7.10	西堀川小路の堀川・路面2面・西 側溝などを検出。	平尾政幸、他「右京三条二坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文 化財研究所 1984年
7	十一町	下合町41	1993.11.15～ 1993.12.10	平安時代の井戸、土壙、溝、柱穴 などを検出。	報告書などは未刊。『平安京右京三条二坊十一 町発掘調査終了報告書』より 古代文化調査会 1994年
8	十一町・ 十四町、 野寺小路	下合町11	1989.11.30～ 1990.2.23	三条坊門小路南側溝、野寺小路東 西両側溝、柵2条、野寺小路川を 検出。	木下保明「平安京右京三条二坊2」『平成元年 度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋 蔵文化財研究所 1994年
9	十二町	新建町5-14 ～30	1978.11.10～ 1978.12.28	建物3棟、平安時代前期の井戸1 基、平安時代以前?の溝などを検 出。	平尾政幸「平安京右京三条二坊」『平安京跡発 掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集 1978』 1979年
10	十三町	三条坊町 14番1他	2005.2.22～ 2005.3.8	鎌倉時代から室町時代の土取跡、 柱穴、江戸時代の耕作跡などを検 出。	山口 真『平安京右京三条二坊十三町跡』京都 市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-19 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2005年
11	十四町	下合町11	2002.10.2～ 2002.11.9	平安時代前期の建物3棟と、区画 施設などの柵または塀などを検出。 宅地割りは1/8町が想定される。	報告書などは未刊。『平安京右京三条二坊十四 町発掘調査終了報告書』より (財)古代学協会 2002年
12	十四町	中京区西ノ京 下合町地内	1998.3.19～ 1998.6.26	三条坊門小路南側溝、平安時代の 建物8棟、門2棟、柵8条、井戸 3基と道祖大路川などを検出。	南 孝雄「平安京右京三条二坊」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文 化財研究所 2000年
13	十五町	東中合町1 市立西京商業 高等学校	2001.1.29～ 2001.3.14	平安時代の池、土壙、柵などを検 出。	網 伸也、他『平安京右京三条二坊十五・十六 町-「齋宮」の邸宅跡-』京都市埋蔵文化財研 究所調査報告第21冊 2002年
14	十五町、 野寺小路	東中合町	2003.11.4～ 2003.12.26	平安時代の建物、溝、柵、野寺小 路川などを検出。	津々池惣一『平安京右京三条二坊十五町跡』京 都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-8 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2004年
15	十五町	東中合町1 市立西京商業 高等学校	1987.5.18～ 1987.6.12	平安時代の溝4条、柱穴などを検 出。他に中世の井戸がある。	本 弥八郎「平安京右京三条二坊」『昭和62年 度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市 埋蔵文化財研究所 1991年
16	十五町	東中合町	2001.10.22～ 2001.11.29	平安時代前期の土壙、井戸、柱穴 を検出。他に室町時代の溝がある。	百瀬正恒、他『平安京右京三条二坊十五町・三坊 二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-6 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年
17	十五町	東中合町	2005.8.8～ 2005.9.2	平安時代の南北溝、川跡、側溝な ど検出。	ト田健司『平安京右京三条二坊十五町・三坊三 町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2005-5 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2005年
18	十五町・ 十六町、 野寺小路	東中合町1 市立西京商業 高等学校	1981.7.3～ 1981.7.31	平安時代中期の押小路両側溝、建 物1棟、井戸1基、平安時代後期 の野寺小路川などを検出。	辻 純一「右京三条二坊(2)」『昭和56年度 京 都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文 化財研究所 1983年
19	十六町	東中合町1 市立西京商業 高等学校	1999.7.21～ 2000.8.30	平安時代の建物群と庭園・泉など、 1町規模の邸宅を検出。	鈴木廣司、他『平安京右京三条二坊十五・十六 町-「齋宮」の邸宅跡-』京都市埋蔵文化財研 究所調査報告第21冊 2002年

3. 遺 構

(1) 基本層序

調査区の現地表面はほぼ平坦であり、その標高は約 33.6 m である。調査区南部 (図 12) では、現地表下 1 m 程までが盛土である。以下、江戸時代から近代まで続くと考えられる耕土および室町時代から江戸時代と考えられる整地土が、合わせて 0.6 ~ 0.7 m の厚さで堆積しており、3 層から 5 層に分層できる。X=-110,132 東西セクション (図 8) では、これらの整地土の直下で、褐色系の地山上面が遺構面となる。地山上面の標高は、32.3 m 前後であり、その地形は調査区北部がやや高く、南方向にゆるやかに下がり、その高低差は 0.3 m 程ある。調査区の北部は、近代の土壌などにより、広範囲に地山面が攪乱されている。

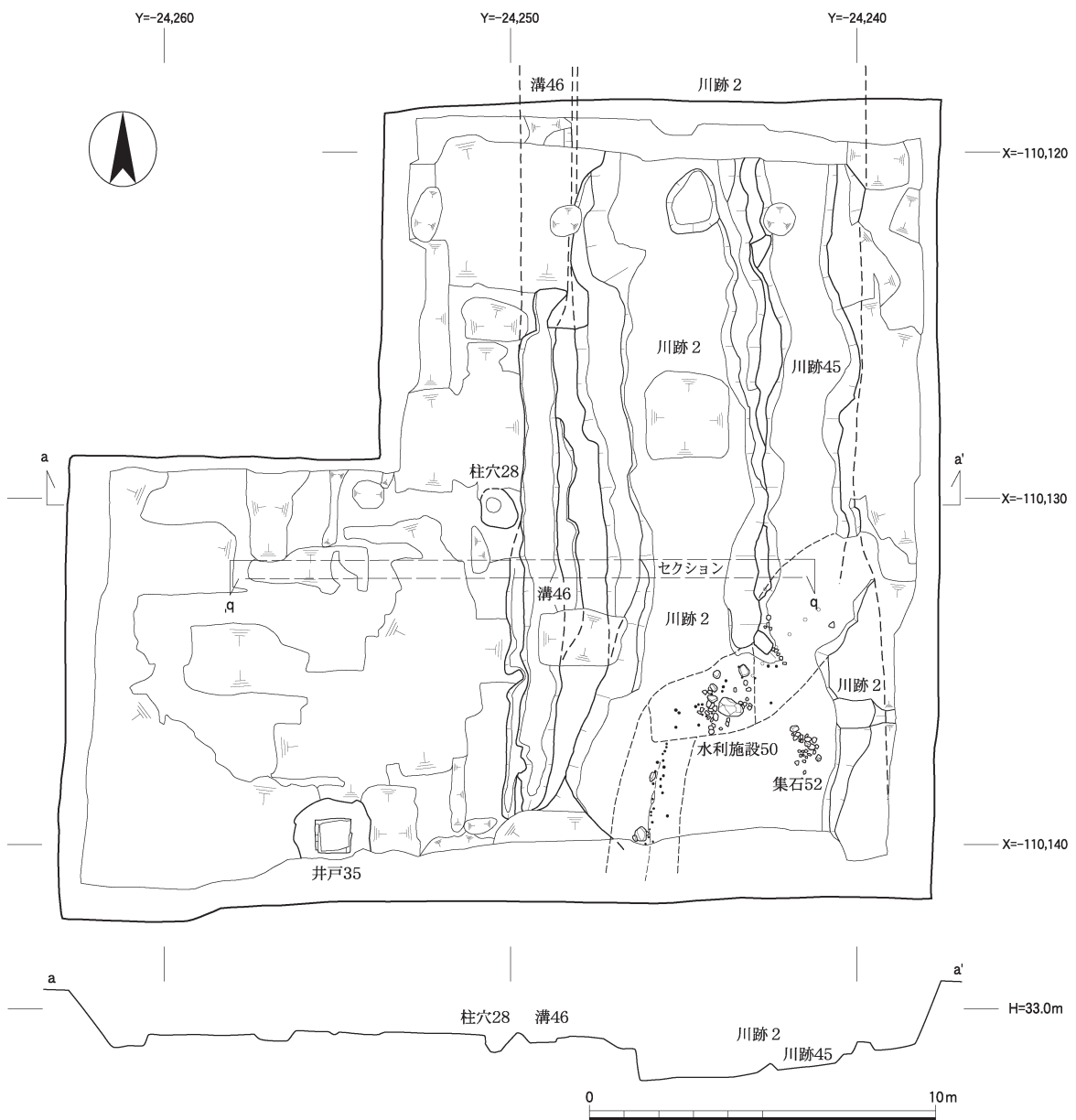


図5 遺構実測図 (1 : 200)

(2) 遺構 (図5)

地山直上に形成された遺構面では、平安時代から室町時代初頭までの各時期の遺構を検出している。室町時代初頭以降の遺構は、整地土上面から形成されている土取土壌などに限られる。

平安時代から室町時代初頭の各時期に比定される遺構群は、十四町内で、平安時代前期から中期初め頃の遺構として井戸 35・柱穴 28 を検出した。野寺小路関連では、野寺小路西築地心想事成位置の東側で南北方向の溝 46 (推定野寺小路西側溝) を検出しているが、西築地跡および犬走りなどは、北壁断面において地山上面の若干の高まりを確認したにとどまり、調査区内では後世の攪乱などの影響が大きく、ほとんど残存していなかった。野寺小路路面および東側溝なども遺存を確認することができなかった。路面部にあたる位置において、南北方向に延び南流する平安時代中期頃には形成され、鎌倉時代から室町時代初頭に廃絶したと考える川跡を検出した。

以下では、平安時代から室町時代初頭に比定される主要な遺構について記しておく。

井戸 35 (図6、図版2) 調査区西部の南壁際で検出した。掘形はやや変形しているが、隅丸方形であり、南辺は調査区外になる。規模は、東西約 2.2 m、南北 1.7 m 以上、深さは検出面から約 1 m を測る。この井戸は作り直しがあり、井戸枠を伴う上部の新段階井戸と、下部に古段階の井戸の一部、横棧などが残存していた。

新段階のものは、上部のほぼ中央に、一辺約 1.0 m、深さ 0.5 ~ 0.6 m の方形縦板組の井戸枠が残存していた。井戸枠は、四隅に高さ約 0.5 m の方形の角柱があり、幅 0.1 m 前後の縦板が一辺に 10 ~ 11 枚が並ぶ。横棧は 2 段残存していた。上部の横棧はわずかな痕跡であるが、縦板上端に位置する。下部の東と西の横棧は縦板下端に位置し、北と南の下部横棧は縦板下端から 0.1 m 程上方に位置する。井戸枠内の埋土 (図6 - 1 ~ 3 層) は、上層・中層・下層と分層できる黒褐色系の砂泥から粘土である。掘形埋土は 5 層から 6 層に分層でき、板などの木片が多く混入していた。これらの板や木片は、新段階井戸構築時に古段階井戸の部材が混入したものであろう。

古段階のものは、新段階井戸枠下端より下層において、井戸枠内と掘形に分層できた。古段階井戸枠内埋土 (図6 - 11・12 層) は、新段階井戸枠内埋土とは明瞭に異なり、礫が多く混じる黄褐色系泥砂と砂である。出土遺物も新段階井戸より古い様相である。掘形埋土は 2 層に分層でき、木片の混入は認められず土器などが混じる。また最下層部では方形の横棧を 1 段のみ検出した。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代前期～中期	井戸35、柱穴28、溝46	井戸35は作り直しがある。
平安時代中期～鎌倉時代	川跡45、川跡2、水利施設50、集石52	水利施設50、集石52は川跡2に伴う
室町時代～江戸時代	整地土、土壌、耕土	土壌は主に土取跡

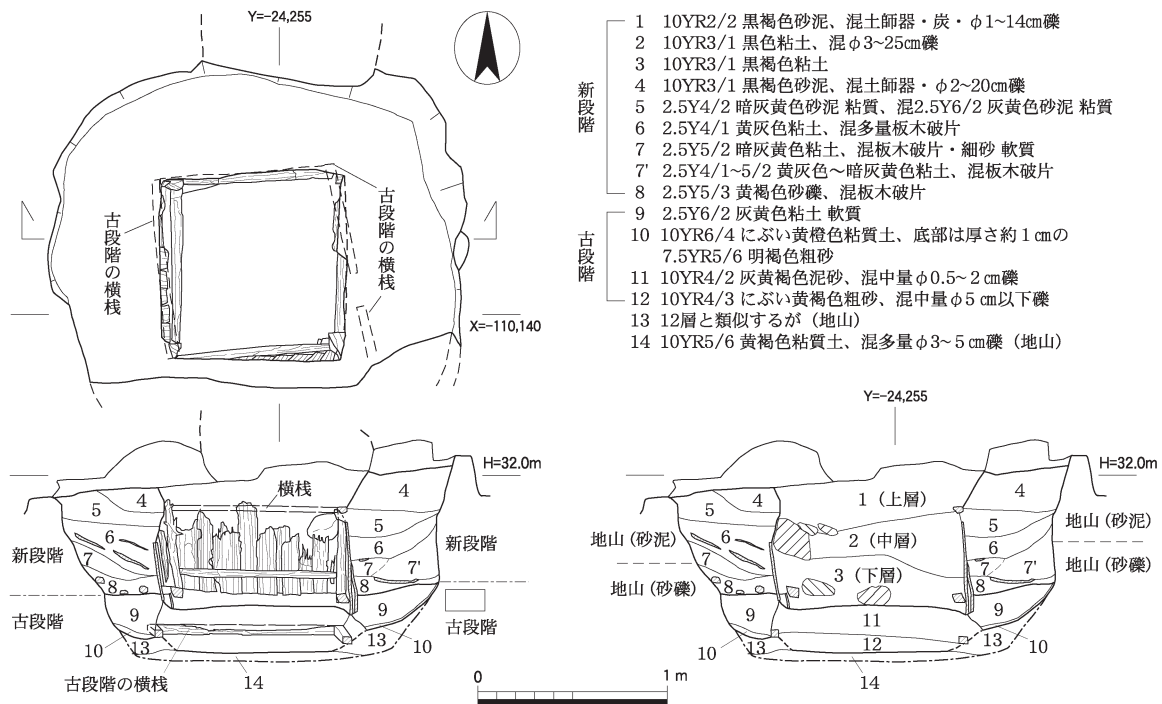


図6 井戸35実測図(1:40)

上部の井戸枠はほぼ方位に沿うが、最下層部の棧は、北に向かって8~10°程西偏する。

井戸35掘形の周囲は地山であるが、標高31.6m前後より下層は砂礫層であり、地下水位もそこまで及んでいたと考えられ、新段階井戸掘形にある砂礫土(図6-8層)は透水層である。また混礫の泥砂・砂層である古段階井戸枠内埋土も透水層であろう。

井戸35は、出土遺物から古段階のものは9世紀半ば頃までには形成され、9世紀末から10世紀初め頃に新段階のものに作り直され、10世紀半ば頃までには埋没して、その機能を失ったもの

と考えられる。

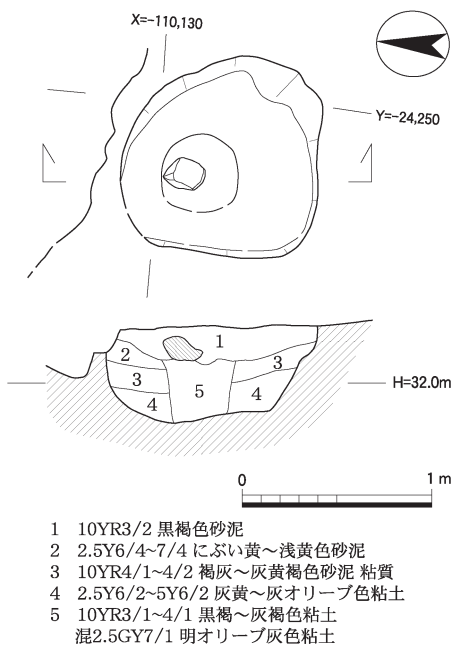
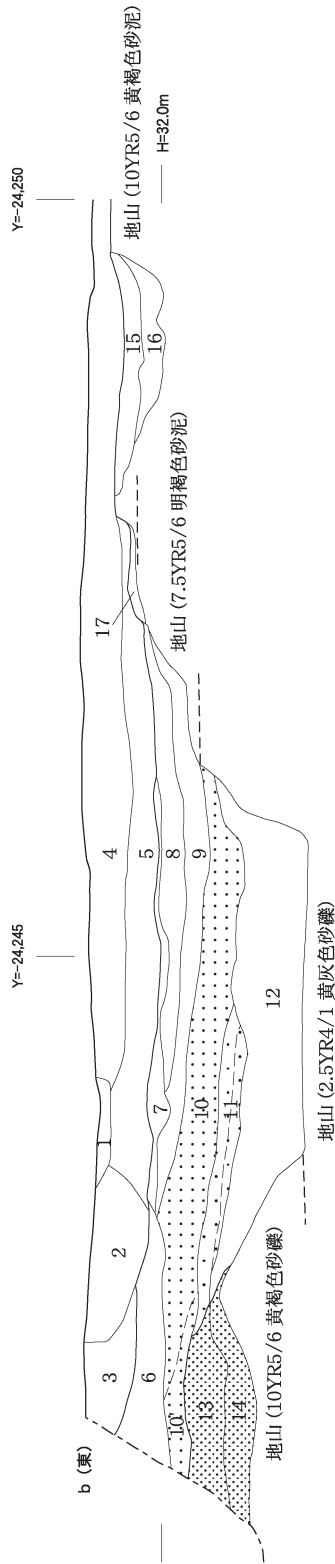
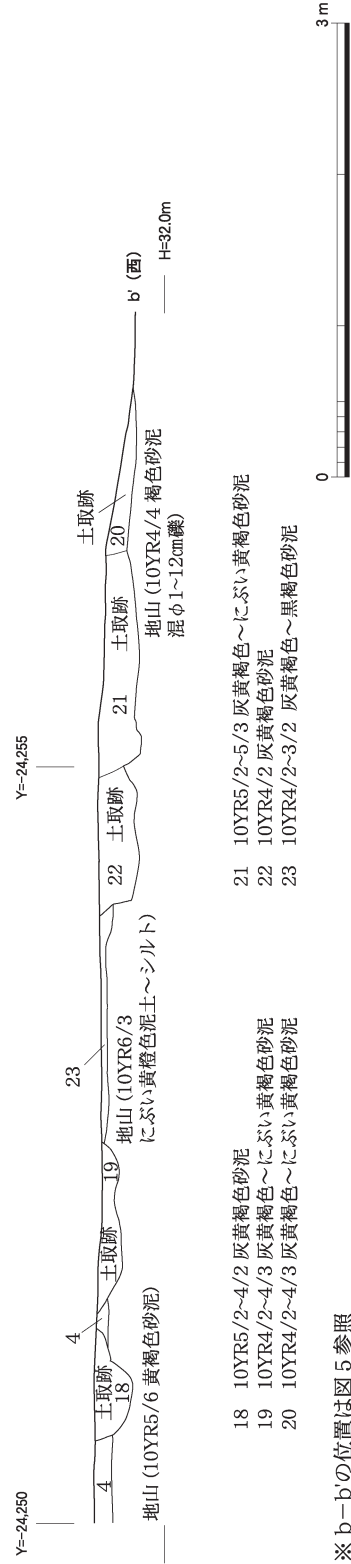


図7 柱穴28実測図(1:40)

柱穴28(図7、図版1) 調査区中央部のやや西側、溝46の西肩部に近接した位置で検出した。掘形の平面形はやや不定形であるが、一辺1.1m程の隅丸形状を呈し、深さは約0.5mである。掘形のやや北西寄りに、径約0.4m、深さ約0.3mの柱痕跡が残存していた。柱痕跡の上面では、長辺約0.2m、短辺約0.15mの石を1個検出しているが性格は不明である。掘形の埋土は2層から3層に分層でき、主に黄色系の砂泥土であり、柱痕跡には粘土が堆積していた。対応する他の柱穴は検出できなかったが、この柱穴の検出位置は十四町東辺部の北五門と六門³⁾の境界付近であり、野寺小路西築地心想定位置の東際であることから、築地内と考えられる。出土遺物から、柱穴28は10世紀頃までには埋没したと考



- | | | |
|--|-------------------------------|--|
| | 1 7.5YR5/6 明褐色泥砂、混中量φ0.5~3cm礫 | 10 10YR4/2 灰黄褐色砂礫 |
| | 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、混細砂 | 10' 10層と類似する砂礫~泥砂 |
| | 3 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、混少量φ1~5cm礫 | 11 2.5Y3/1 黒褐色粘土、下層は砂礫 |
| | 4 10YR4/2~3/2 灰黄褐色~黒褐色砂泥 締まる | 12 2.5Y4/1 黄灰色粘土 粘質、混微砂 |
| | 5 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 | 13 10YR4/6 褐色砂礫、混φ1~5cm礫 |
| | 6 10YR4/1 褐灰色粘質土、混少量φ1~4cm礫 | 14 5YR3/4 暗赤褐色砂礫 |
| | 7 10YR3/1 黒褐色砂泥、混少量粗砂~礫 | 15 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 |
| | 8 10YR4/1 褐灰色粘土粘質 | 16 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、混粘質ブロック10YR5/6 黄褐色砂泥 |
| | 9 2.5YR4/1 黄灰色粘土 | 17 10YR5/6 黄褐色砂泥、混ブロック10YR3/4 暗褐色砂泥 |



- | | | |
|--|------------------------------|------------------------------|
| | 18 10YR5/2~4/2 灰黄褐色砂泥 | 21 10YR5/2~5/3 灰黄褐色~にぶい黄褐色砂泥 |
| | 19 10YR4/2~4/3 灰黄褐色~にぶい黄褐色砂泥 | 22 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 |
| | 20 10YR4/2~4/3 灰黄褐色~にぶい黄褐色砂泥 | 23 10YR4/2~3/2 灰黄褐色~黒褐色砂泥 |

※ b-a'の位置は図5参照

図8 セクション断面図 (1:50)

える。

溝 46 (図版 1) 調査区中央部で検出した南北方向の溝である。溝の幅は 1.0 ~ 1.5 m、深さは 0.3 m 前後ある。長さ約 20 m にわたり検出した。埋土 (図 8 - 15・16 層) は黄褐色系の砂泥土で、深い部分では 2 層に分層できる。出土遺物から 10 世紀半ばまでには埋没したものと考えられる。

溝 46 は、その心が野寺小路西築地心想事成位置から東へ 2 m 前後にあり、出土遺物が平安時代前期から中期初め頃までのものを主体とすることから、平安時代の野寺小路西側溝であると考えられる。

川跡 45 (野寺小路川、図 8、図版 3) 調査区の東側において、調査区北壁より南へ長さ約 12 m にわたり残存していた。後述する川跡 2 より古い段階の流路の一部と考えている。その底面は、川跡 2 底面より 0.3 ~ 0.4 m 程高く、幅は 2 m 前後、深さは約 0.4 m ある。川跡 45 の南側は、X=-110,132 付近で後世の削平により不明瞭になる。埋土は褐色~暗赤褐色砂礫である。川跡 45 の埋没は、出土遺物から 11 世紀前半頃と考える。

川跡 45 は、その心が野寺小路東築地心想事成線から西へ 2 m 前後に位置しており、東側溝推定位置とほぼ重なる。調査地北隣の十一・十四町の調査 (図 4 - 8、図 27) において一部検出され、野寺小路川によって侵食されている野寺小路東側溝に連続するとみられる遺構は、今回の調査では検出されなかった。この川跡 45 は、検出面が西側溝 (溝 46) の底部より 0.2 m 程低いことなどから、東側溝を踏襲した流路の可能性がある。

川跡 2 (野寺小路川、図 8、図版 3) 調査区東部のほぼ全域において、長さ 20 m 以上にわたり検出した南北方向に延びる川跡である。西岸は、ほぼ全体が残存していたが、東岸は攪乱され、一部のみが残存する。幅は東西 8 ~ 9 m 程、深さは北壁では約 1.2 m、南壁では約 1 m である。

川跡内の堆積土層 (図 8) は、上層 (第 1 層として掘り下げ、4 層に分層できる主に暗褐色系の泥土)、中層 (第 2・3 層として掘り下げ、両者とも類似する砂礫)、下層 (第 4 層として掘り下げ、第 1 層と類似する泥土) に分層できる。上層の段階で流路としての幅が最も広く、中層の砂礫層は流路の流速・流量が増す洪水時における堆積層と考えられる。下層では、流路幅が 4 m 前後であり、狭くなって川跡 45 の西側に並走する。その東側は地山であり、その高さは一番高い所で川跡 2 の底面から 0.7 m 程ある。

出土遺物や堆積状況から、下層は 12 世紀後半頃から 13 世紀前半頃までには堆積している。中層は下層との大きな時期差を見いだすことが難しいが、上層部を含めて 13 世紀末から 14 世紀前半頃までには埋没し、流路の機能は完全に失われてしまったと考えられる。

水利施設 50 (図 9 ~ 15、図版 4・5) 川跡 2 の南辺の堆積土から、南北約 7 m、東西約 5 m にわたり杭列を検出した。これらは出土状況から 3 つの部分に分けてみるができる。

調査区南壁寄りの第 1 部分は、川跡 2 の西岸側、調査区南壁より北へ約 3 m の部分である。木杭列が川跡 2 西岸とほぼ同じ方向、やや東寄りの北方向へ伸びる。杭列は約 0.5 m の東西幅に径 0.02 ~ 0.1 m 程の大小の杭が不規則に 2 ~ 3 列打ち込まれ、北部はやや疎らになる。東側の土の流失を防ぐためか、木杭は東側部分に多く打ち込まれ、土層中には微量の植物遺体が認められ

た。杭列南辺では、東側杭列に伴って、高さ約 0.03 m 前後、幅約 0.02 m、長さ約 1.5 m にわたり、わずかに残存する竹のシガラミを検出した。シガラミは木杭を挟み込んだり、杭を交互に絡んでいる状況が認められる。このシガラミは、検出部分よりさらに北にも施されていたと思われる。その他に南壁際には基礎の一部を形成するとみられる長径約 0.4 m、短径約 0.3 m、高さ 0.2 m 程の平たい石（図 9・13・15）が設置されていた。

調査区南壁断面観察（図 9・12・15）では、何層にも重なり、これらの杭列を覆う土層が認められた。土層は全体で高さ約 0.6 m、幅 1.9 m 程であり、8 層に分層できた黒褐色系の粘質泥土である。このことから、第 1 の部分は堤状になっていたと考えられ、木杭列や植物遺体・石・シガラミなどは、堤の骨組みであると考えられる。

第 2 部分は、第 1 部分（堤状になる）から北東にのび、川跡 2 を横切る部分である。木杭列が南西から東西方向に川跡を横切り、約 1.5 m の南北幅に、径 0.1 m 程の杭が隣接して多く打ち込まれ、2～4 列になっている。木杭列の中程には、幅約 0.5 m、長さ約 2 m の範囲で直径 0.1～0.3 m 程の礫がほぼ南北に並ぶ。さらにその東隣には、長径約 0.7 m、短径約 0.5 m、高さ約 0.5 m の大礫を検出した。

この大礫部分（図 11 B－B' 断面図・図 13 C－C' 断面図・図 14）が位置する第 2 部分の断割調査を行ったところ、大礫の直下で径約 0.4 m、深さ約 0.2 m の小土壌が検出された。その内部は径約 0.3 m、高さ 0.1 m 程の礫や瓦片などが根石状に詰まっており、その上に大礫を据えている状況が認められた。またその小土壌の周囲の大礫直下において数本の木杭を検出している。

第 2 部分の杭列周辺の埋土は、南北約 2 m、東西約 3 m の範囲にわたり、多量の砂礫が混じる粘質土（図 10）であり、西端部分は第 1 部分の堤状の土層を掘り込んでいる。またこの杭列と大礫は、第 1 部分の堤を形成する土層上面より低い位置に据わる。第 2 部分における杭列と大礫も第 1 部分のものと同様に堤状の構築物の基礎を形成するものと考えられ、杭列が川底を横断している点を踏まえれば、堤状の構築物は川の流れに対して堰状を成すものであったと考えられる。

第 3 部分は、第 2 部分北東側である。竹杭が混じり、木杭列と 0.8 m 程並列し、東側は両杭とも疎らになる。竹杭列は、南西から北東にほぼ直線上に一直列、0.5～0.6 m 前後の間隔で約 2.8 m



図 9 杭列を覆う土層（北から）



図 10 基礎材の大礫と周辺の混砂礫粘質土（北東か

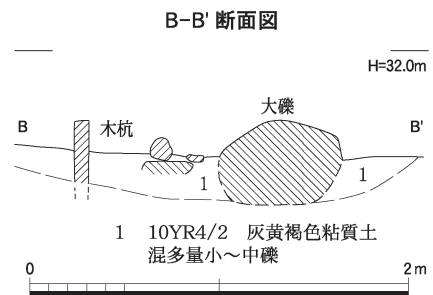
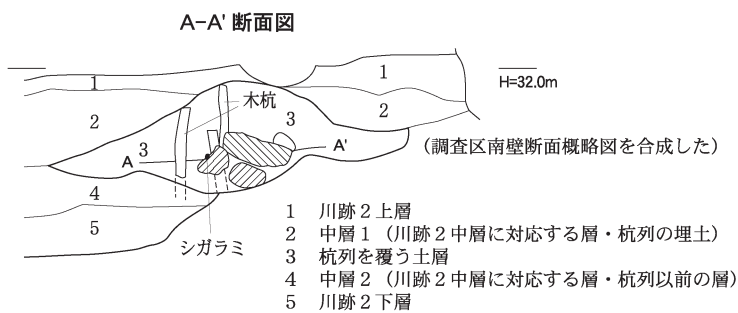
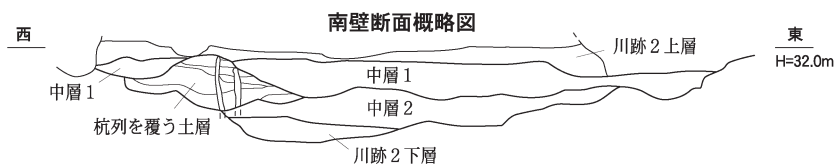
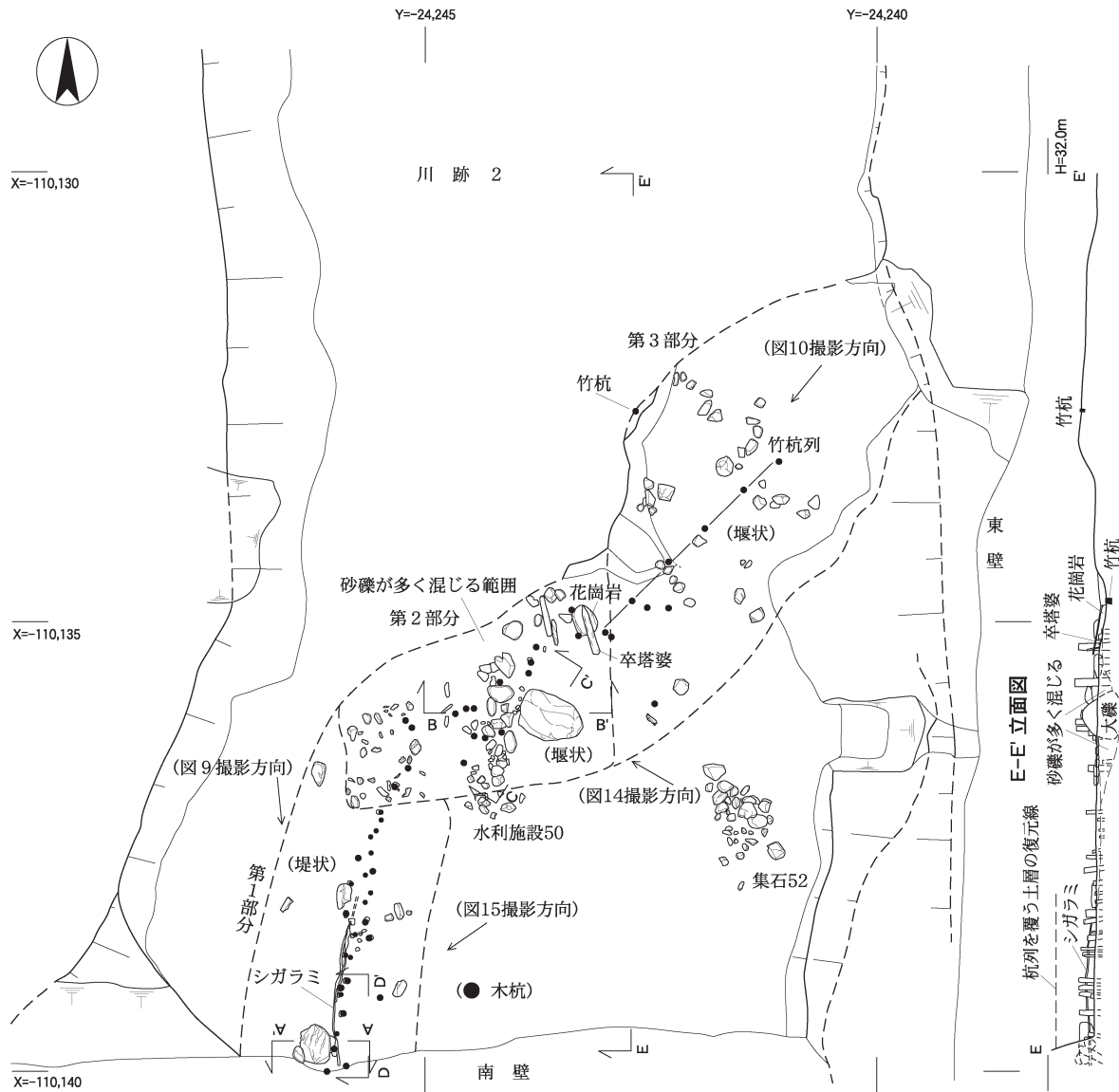


図 11 水利施 50 実測図と復元概念図 (1 : 40、1 : 80)

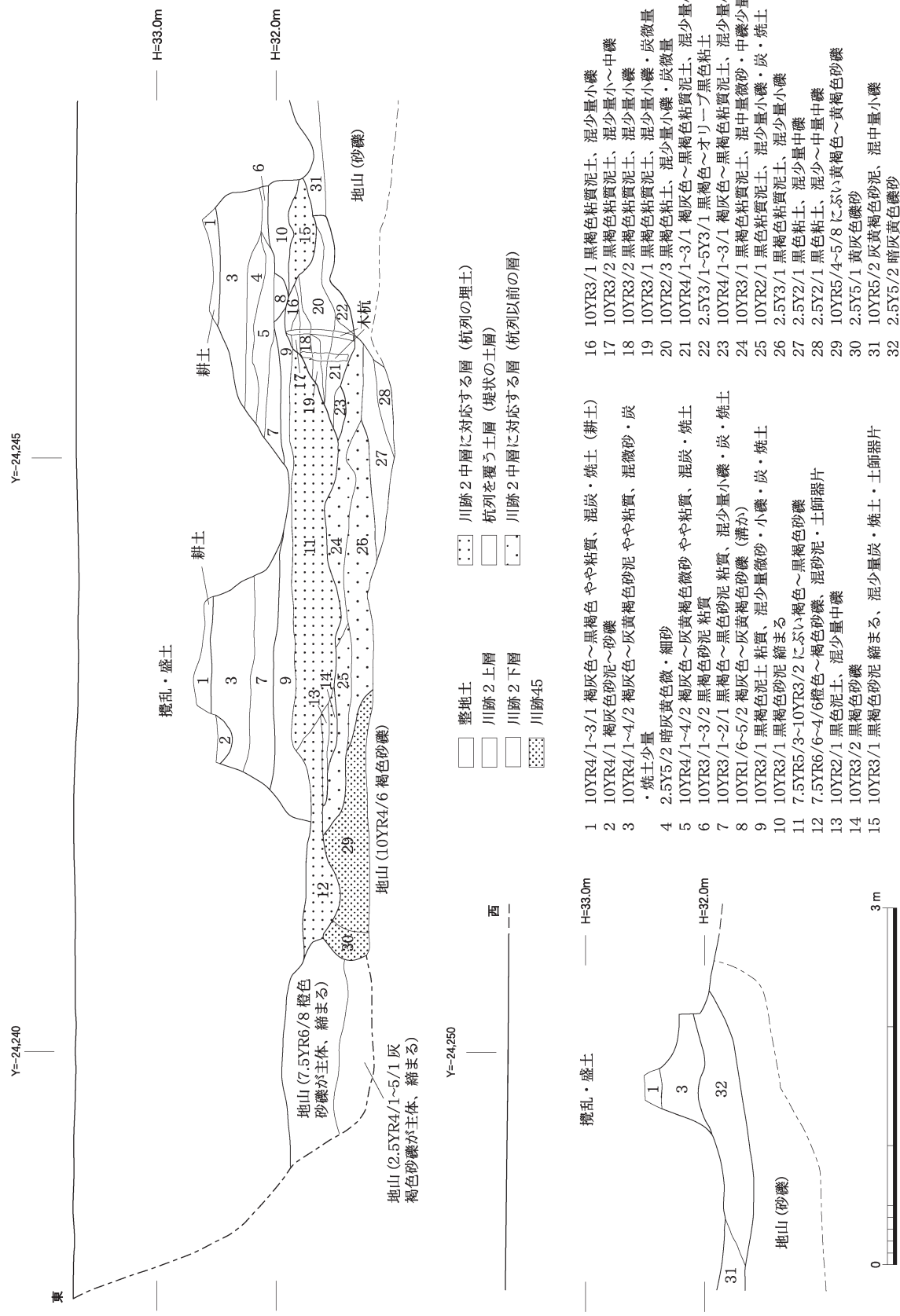


図 12 調査区東部南壁断面図 (1 : 50)

- 杭列を覆う土層
- 16 10YR3/1 黒褐色粘質泥土、混少量小礫
 - 17 10YR3/2 黒褐色粘質泥土、混少量小礫
 - 18 10YR3/2 黒褐色粘質泥土、混少量小礫・炭微量
 - 19 10YR3/1 黒褐色粘質泥土、混少量小礫・炭微量
 - 20 10YR2/3 黒褐色粘質泥土、混少量小礫・炭微量
 - 21 10YR4/1~3/1 褐灰色~黒褐色粘質泥土、混少量小礫
 - 22 2.5Y3/1~5Y3/1 黒褐色~黒褐色粘質泥土、混少量小礫
 - 23 10YR4/1~3/1 褐灰色~黒褐色粘質泥土、混少量中礫
 - 24 10YR3/1 黒褐色粘質泥土、混中量微砂・中礫少量
 - 25 10YR2/1 黒色粘質泥土、混少量小礫・炭・焼土
 - 26 2.5Y3/1 黒褐色粘質泥土、混少量小礫
 - 27 2.5Y2/1 黒色粘土、混少量中礫
 - 28 2.5Y2/1 黒色粘土、混少~中量中礫
 - 29 10YR5/4~5/8 にふい黄褐色~黄褐色砂礫
 - 30 2.5Y5/1 黄灰色礫砂
 - 31 10YR5/2 灰黄褐色砂泥、混中量小礫
 - 32 2.5Y5/2 暗灰黄色礫砂

- 1 10YR4/1~3/1 褐灰色~黒褐色 やや粘質、混炭・焼土 (耕土)
- 2 10YR4/1 褐灰色砂泥~砂礫
- 3 10YR4/1~4/2 褐灰色~灰黄褐色砂泥 やや粘質、混微砂・炭・焼土少量
- 4 2.5Y5/2 暗灰黄色微・細砂
- 5 10YR4/1~4/2 褐灰色~灰黄褐色微砂 やや粘質、混炭・焼土
- 6 10YR3/1~3/2 黒褐色砂泥 粘質
- 7 10YR3/1~2/1 黒褐色~灰黄褐色砂泥 粘質、混少量小礫・炭・焼土
- 8 10YR1/6~5/2 褐灰色~灰黄褐色砂礫 (溝か)
- 9 10YR3/1 黒褐色泥土 粘質、混少量微砂・小礫・炭・焼土
- 10 10YR3/1 黒褐色砂泥 締まる
- 11 7.5YR5/3~10YR3/2 にふい褐色~黒褐色砂礫
- 12 7.5YR6/6~4/6 橙色~褐色砂礫、混砂泥・土師器片
- 13 10YR2/1 黒色泥土、混少量中礫
- 14 10YR3/2 黒褐色砂礫
- 15 10YR3/1 黒褐色砂泥 締まる、混少量炭・焼土・土師器片

- 整地土
- 川跡2上層
- 川跡2下層
- 川跡45
- 川跡2中層に対応する層 (杭列の埋土)
- 杭列を覆う土層 (堤状の土層)
- 川跡2中層に対応する層 (杭列以前の層)

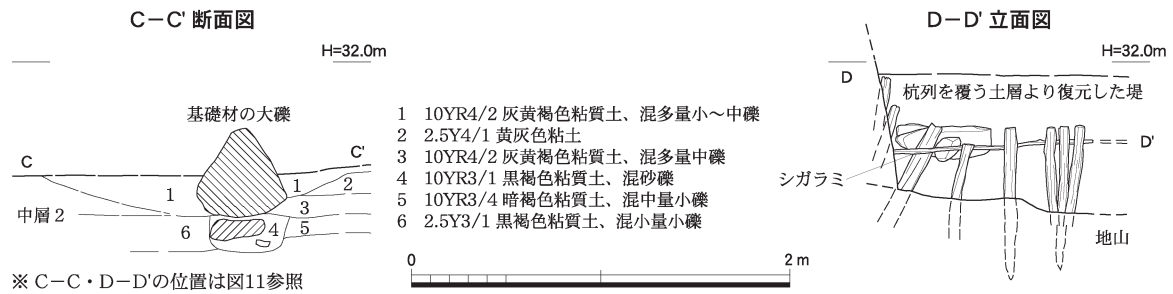


図 13 基礎材の大礫部分と杭列実測図（1：40）



図 14 基礎材の大礫部分の断割り（南東から）



図 15 杭列の断割り（北東から）

のび、径 0.05 m 前後の根元が土層中に僅かに埋まり、残存部を 0.1 m 程出した状態で検出した。竹杭はその他に北西へ約 1.5 m 離れた地山上にも 1 本ある。第 3 部分の埋土は、西側の第 2 部分の埋土と異なる粘質土である。第 3 部分は、第 2 部分に連続し川跡を横切る堰状の構築物を形成すると考えられる。

前述したように水利施設 50 としての遺構は、川跡 2 の西岸近くを並走し南方へのびる堤状を呈する第 1 部分と、その北端近くから川跡 2 をやや斜めに北東方向へ横断する堰状の部分（第 2 部分と第 3 部分）から形成されている。第 2 部分には、杭列と直行するように礫が南北に設置されていた大礫沿いの石列などの検出状況から、堰口である樋が設けられていたとも考えられる。堰状遺構によって、水位上昇した水は、西岸部分と堤状の間の溝状流路（図 12 - 15 層）を通り南方へ分流されていたものと考えている。

水利施設 50 の第 1 部分と第 2 部分の時期の前後関係は、第 2 部分の埋土が、第 1 部分の土層を掘り込んでいることから、第 2 部分は第 1 部分より新しい時期であると考えられるが、検出状況からわずかな時期差と考えている。また第 2 部分の大礫の下より木杭を検出したが、このことは第 2 部分が修復されたものである可能性を示す。第 3 部分の竹杭列は検出状況から第 2 部分の木杭とほぼ同じ時期のものと考えられるが、竹杭の残存する根元部分から、復元高は木杭より高いと考えられ、木杭より後のものである可能性も否定できない。全体としては、水利施設 50 は、周囲の出土遺物から 13 世紀後半頃から 14 世紀前半頃まで機能が維持されていたと考えられる。成立時期は 12 世紀代に遡る可能性はあるが、13 世紀前半頃と考えたい。

集石 52 (図版 5) 川跡 2 東岸近く竹杭列の南側に、南北約 1.5 m、東西約 0.7 m の範囲で検出した。直径 0.1 ~ 0.3 m 程の礫が広がる。集石はその形状から石を据える根固め石の可能性があり、時期は不明である。

なお調査区南壁から北側約 3 m の川跡 2 西岸近くの埋土は、川跡 2 上流の下層 (灰色系の泥土) と類似し、第 1 部分 (堤状遺構) は川跡 2 下層と中層 2 (図 11) の上に構築されており、地山である川跡 2 西岸は湾曲し侵食されている。また大石の北側、木杭と竹杭列が並列する近辺で、花崗岩 (既述した石類の石材は、砂岩やチャートなどの堆積岩が主である。) と卒塔婆が出土した。水利施設 50 の構築時に埋まったものであると考える。

4. 遺物

遺物は整理箱で 26 箱出土した。内訳は、土器類・陶磁器類・瓦類および金属製品・石製品などが 25 箱、木製品が 1 箱である。大半が土器・陶磁器類であり、瓦類は 7 箱程度である。先土器時代末期から縄文時代草創期頃の石器 1 点の他は、平安時代から江戸時代⁴⁾にわたる遺物が出土しているが、その中では平安時代前期から中期初め頃 (9 世紀 ~ 10 世紀前半) の遺物が多く、10 世紀後半頃に比定できる遺物は減少し、これ以降の時期の出土も各時期をとおして少量にとどまる。

(1) 土器類 (図 16、図版 6・7)

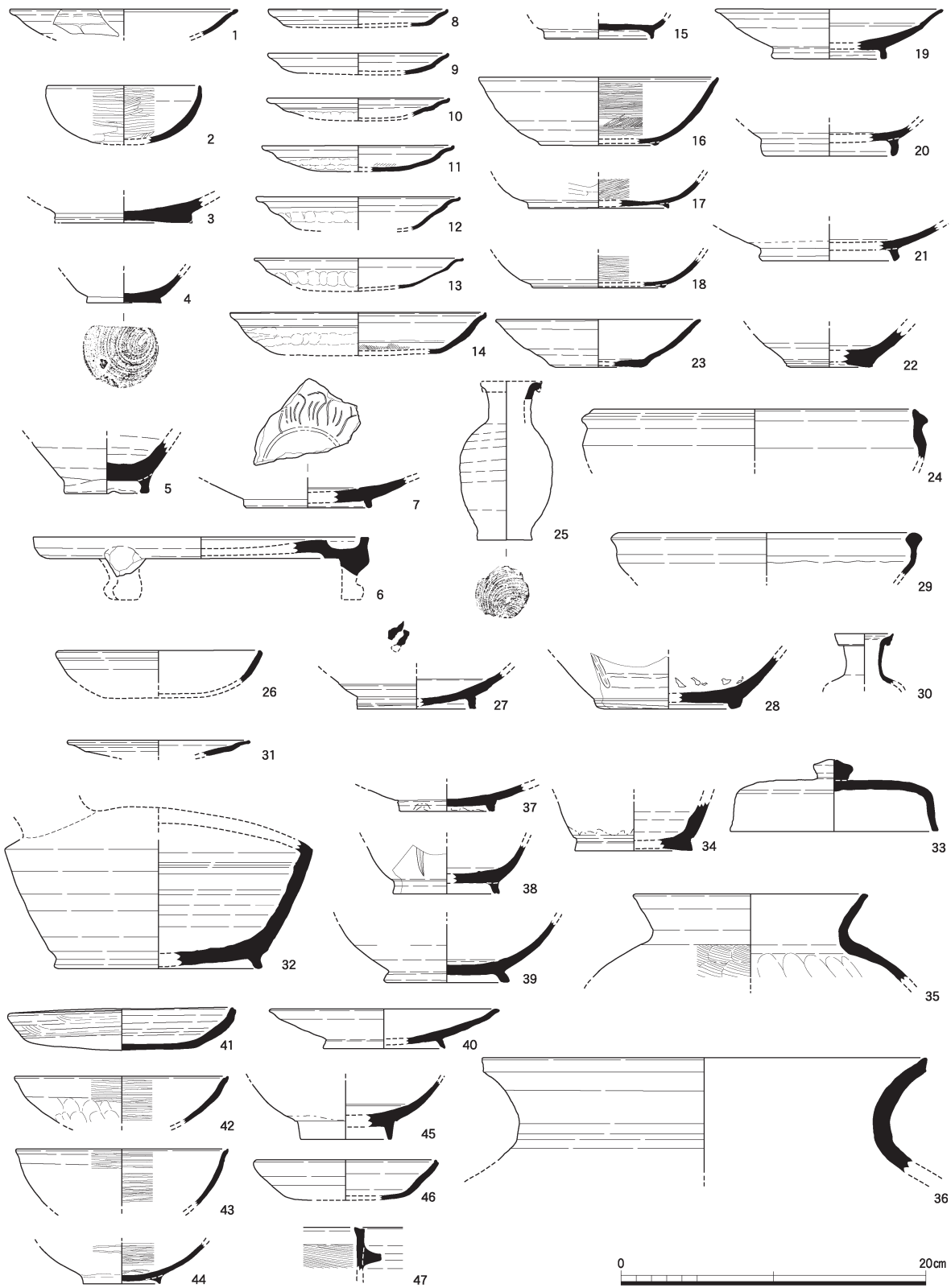
出土土器は、須恵器が一番多く、以下土師器、緑釉陶器、灰釉陶器の順である。その他に少量の黒色土器、白色土器、輸入陶磁器、瓦器などがある。主な遺構別に述べる。

井戸 35 出土土器 (1 ~ 25) (1 ~ 6) は古段階の井戸から出土し、そのうち (1 ~ 5) は古段

表 3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
先土器時代末～ 縄文時代草創期	石器	少量	ナイフ形石器 1 点	0 箱	0 箱
平安時代前期 ～中期初め頃	土師器、須恵器、緑釉陶器、 灰釉陶器、黒色土器、白色 土器、瓦類、軒瓦、輸入陶 磁器	7 箱	土師器 11 点、須恵器 11 点、緑 釉陶器 7 点、灰釉陶器 3 点、 黒色土器 5 点、軒瓦 3 点、輸 入陶磁器 3 点	4 箱	0 箱
平安時代中期 ～鎌倉時代	土師器、須恵器、瓦器、輸 入陶磁器、石製品、金属製 品、骨	13 箱	土師器 2 点、瓦器 4 点、輸入 陶磁器 1 点、石製品 2 点、金 属製品 2 点、骨 2 点	12 箱	0 箱
	木製品	3 箱	木製品 6 点	1 箱	1 箱
室町時代 ～江戸時代	土師器、陶器、磁器、石製 品、金属製品、木製品、骨	8 箱	石製品 1 点、金属製品 1 点、 骨 1 点	1 箱	7 箱
合計		31 箱	66 点 (5 箱)	18 箱	8 箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より 5 箱多くなっている。



井戸35古段階出土	1 ~ 6	井戸35新段階出土	7 ~ 25
柱穴28出土	26	溝46出土	27 ~ 30
川跡45出土	31 ~ 32	川跡 2 出土	33 ~ 47

図 16 出土土器実測図 (1 : 4)

階井戸枠内から、(6)は掘形から出土した。古段階井戸の出土土器は、9世紀代のものが主であるが、多くない。

(1)は土師器皿である。口縁部は丸味を帯び、内面はナデ調整、外面はケズリ調整である。残存部では外面全体にヘラケズリ痕が認められ、9世紀中葉頃に比定される。(2)は黒色土器A類杯である。底部は丸底で、口縁部は内反してして薄く収まる。内面は横方向のヘラミガキを施し、外面は体部上半から口縁部にかけてヘラミガキを施し、体部下半は粗いヘラケズリ痕が認められる。9世紀前半頃に比定される。(3)は大きめの緑釉陶器碗の底部であり、削り出しの平高台である。釉は内外面に施される。(4)は小さめの緑釉陶器碗の底部であり、削り出しの平高台である。底部外面には回転の糸切り痕が残る。釉は内外面に施される。(3・4)とも時期は9世紀中葉～後半頃に比定できる。(5)は須恵器壺である。貼り付けの輪高台で、内面は回転ナデ調整である。体部外面から底部外面はケズリ調整、高台およびその両側一定幅はナデ調整である。8世紀末～9世紀前半頃に比定される。(6)は三脚と考える須恵器獸脚付円面硯⁵⁾である。脚部はヘラケズリで面取り状に成形する。底部裏面は中央を削り込んで周囲を高台状にし(海)を作り出している。体部外面はナデ調整である。外縁部の(海)には墨の痕跡が残る。硯面(陸)は使用痕が顕著で、表面が非常に滑らかである。時期は8世紀末～9世紀前半頃に位置付けておく。

(7～25)は新段階の井戸から出土した。そのうち(7～10・12～17・19・20・22～25)は新段階井戸枠内上層から出土した。(11・18)は新段階井戸枠内中層から出土した。(21)は新段階井戸枠内下層から出土した。新段階井戸の出土土器は、土師器・黒色土器を中心に10世紀前半頃のもの为主体を占めるが、平安時代前期のものも混入している。

(7)は緑釉陶器皿であり、底部内面には陰刻花文が施されている。高台は貼り付けの輪高台で、内外面に釉が施され、9世紀後半頃に比定される。(8～11)は土師器皿である。体部上端から口縁は外反し、口縁部は上方へ小さく突起させるように収める。内面はナデ調整、外面はナデとオサエ調整である。器壁は各個体を通じ薄手である。時期は平安京Ⅱ期新～Ⅲ期古の10世紀前半頃に比定される。(12～14)は土師器杯である。体部上端から口縁は外反し、口縁部上端がわずかに丸く突起する。口縁部の形態と調整は土師器皿(8～11)に類似し、(12・13)は器の厚さも同様に薄手である。時期は10世紀前半頃に比定しておく。(15～18)は黒色土器A類碗である。底部にやや低い貼り付け輪高台が付く。体部内面には横方向のヘラミガキを施す。(16)は内面のヘラミガキのすき間にハケ目痕が認められる。(17)は体部外面下端にわずかにヘラケズリが認められる。これらの黒色土器の時期は土師器皿・杯と同様に10世紀前半頃に比定される。(19)は緑釉陶器皿であり、外面の稜は不明瞭であるが稜皿である。体部の上端近くで立ち上がり、口縁部にかけてゆるく外反する。高台は貼り付けの輪高台である。釉は内外面に施される。(20)は灰釉陶器であり、体部はほとんど残存していなかったが、高い高台形状と体部の立ち上がり強いことから碗と考えられる。高台はナデ調整であり、やや高い貼り付けの輪高台である。底部内面にのみ施釉する。(21)は灰釉陶器皿である。底部内面と高台はナデ調整を施し、高台は貼り付けの少し低い三日月高台である。釉は体部内外面にのみ施され、底部は無釉である。これらの緑釉陶器・

灰釉陶器の時期は 10 世紀前半頃に比定される。(22) は輸入の越州窯青磁碗であり、削り出しの蛇の目高台に重ね焼きの痕跡「目あと」が残る。釉は内外面に施される。時期は 9 世紀後半頃に比定される。(23) は土師器杯である。体部は大きく開き、口縁部はやや外反する。底部外面はナデ調整が加えられているが、不明瞭ながらヘラ切りであろう。体部内外面は不明瞭ながら回転ナデ調整が認められ、ろくろ成形の土器であろう。時期は 10 世紀前半頃に比定される。(24) は須恵器鉢で、焼成が甘く、調整は不明瞭である。口縁部断面は三角形に発達した形態を持ち、丹波篠窯産と考えられる。時期は 10 世紀前半頃に比定される。(25) はほぼ全体がわかる須恵器壺である。外面はやや雑な回転ナデ調整であり、粘土紐の単位が窺える。底部は平底で静止の糸切り痕が残る。時期は 10 世紀前半頃に比定される。

柱穴 28 出土土器 (26) 出土遺物は、少量小片であるが、その中から時期がわかる土器を 1 点図示した。

(26) は土師器碗で、口縁部が内反する。柱痕跡から出土した。小片であるが外面にはヘラケズリ痕は認められず、口縁部はヨコナデ調整、体部上部はオサエ調整の痕跡が認められ、平安京Ⅱ期古～中の幅に位置付けられ、時期は 9 世紀後半頃に比定される。

溝 46 出土土器 (27～30) 出土土器は、10 世紀前半頃のものが主体を占めるが、8 世紀末から 9 世紀代の土器も数多く出土している。

(27) は緑釉陶器と形状が類似し、底部内面はヘラミガキが施されているが、釉が認められず、須恵器の皿あるいは碗⁶⁾と考えておく。削り出しの輪高台で、内面に黒色の物質が付着している。底部外面高台内には墨痕と思われるものが残り、底部外面の表面は少し滑らかになっていることから、転用碗である可能性が高い。時期は 9 世紀後半頃に比定される。(28) は輸入の越州窯青磁碗であり、体部外面はヘラによる縦方向の凹線により輪花としている。削り出し輪高台の端部と底部内面の周縁部に「目あと」が残る。釉は内外面に施される。時期は 9 世紀末～10 世紀前半頃と推定される。(29) は須恵器鉢である。口縁部の断面形は、丸味を帯びた方形状を呈し、体部の器厚は薄い。丹波篠窯産と考えられ時期は 10 世紀前半頃に比定される。(30) は小振りな須恵器壺の上半部である。頸部から口縁部にかけては折れ曲がるように外へ開く。口縁端部は上端が細く尖り、下端は頸部に接するように下がる。時期は 9 世紀後半頃～10 世紀初め頃に比定される。

川跡 45 出土土器 (31・32) 8 世紀末～9 世紀および 10 世紀前半の土器・陶磁器が主であるが、時期が 11 世紀頃の土師器羽釜、土師器皿などの小片も少量含まれている。

(31) は土師器皿である。体部上端から口縁部はつよく外反し、口縁端部は上方へわずかに丸く突起する。平安京Ⅲ期に属し、10 世紀後半頃に比定される。(32) は須恵器壺である。角張る肩部と細い貼り付け高台が付く。角張る肩や体部の扁平さからみて平瓶と考えられる。9 世紀頃か。

川跡 2 出土土器 (33～47) 出土土器は、川跡 45 からの出土土器と共通した様相をもち、9 世紀～10 世紀前半頃のものが量的にも主体を占め、その中に平安時代後期から鎌倉時代のものが少量含まれる。図示したもののうち、上層 (第 1 層) からの出土土器は、(33～39・41・44・46) である。中層 (第 2・3 層) からの出土土器は、(43・45) である。(47) は水利施設 50 以前の

中層に対応する層から出土した。下層（第4層）からの出土土器は、(40・42)である。

(33)は須恵器の蓋で、天井部外面はケズリ調整の後、宝珠形のツマミを貼り付けている。ツマミとその周辺はナデ調整である。口縁部外面から端面および内面は回転ナデ調整である。宝珠のツマミが付く蓋の端部の形状から壺の蓋と考えられる。8世紀末から9世紀前半頃に比定される。(34)は輸入白磁の壺である。平高台で、体部外面に釉が施されており、下端部から底部外面は露胎であり、内面にも釉の垂れた痕跡が認められる。9世紀後半から10世紀前半頃に比定される。(35)は須恵器甕で、口縁部の内外面は横方向のナデ調整、体部外面はタタキで成形する。口縁部は外へ直線的に短く開き、外傾する端面をもつ。体部内面には斜め方向に連続する指オサエ状の指圧痕跡が残り、外面は不明瞭であるが回転ナデ調整も認められる。時期は9世紀後半から10世紀前半頃に比定される。(36)も須恵器の甕である。口縁部は外反し、垂直した端面をもつ。頸部から口縁部は内外面とも横方向のナデ調整である。時期は9世紀頃に比定される。(37)は緑釉陶器皿である。埋没中の変化によって生じた釉色に大きな濃淡さがある2片が接合して、同一個体と確認できたものであり、高台は削り出しの輪高台である。体部内外面と高台外面に釉が施されるが、底部内面と高台内面は無釉である。(38)は緑釉陶器椀である。体部内面下端には浅い凹線の圏線がめぐり、底部内面にトチンの痕跡があり、体部外面を輪花としている。高台は貼り付けの輪高台であり、内外面に釉が施される。(39)は大きめの緑釉陶器椀であり、体部内面下端には圏線状の浅い窪みがある。高台は貼り付けの輪高台であり、内外面に釉が施される。(40)は灰釉陶器皿である。体部は浅く直線的に開き、口縁部は上方へやや立ち上がり、外反する。高台は貼り付け高台である。内面のみ釉が施され、濃淡がある。(37～40)の緑釉陶器・灰釉陶器の時期は10世紀前半頃に比定される。(41)は土師器皿である。不明瞭ながら体部外面上部から口縁部外面は2段凹みのナデであり、口縁部は外傾する端面を持ち、断面はほぼ三角形を呈する。平安京V期中に属すると見られ、12世紀前半頃に比定される。(42)は瓦器椀であり、体部内面と体部上部外面から口縁部にヘラミガキを施す。体部外面下部は不明瞭ながらオサエの痕跡が認められる。法量や体部内外面のヘラミガキの状態などから、時期は12世紀後半から13世紀前半頃の幅におさまると考えられる。(43)も瓦器椀であり、体部内面と体部外面上部から口縁部にヘラミガキを施す。内面のヘラミガキ単位間に多くの隙間が見られるようになっているが、外面にヘラミガキが残る点から、時期は12世紀後半から13世紀頃に位置付けられると見ている。(44)は瓦器椀の底部であり、貼り付けの低い高台が付く。体部外面の下端付近には粗いヘラミガキが認められるが、内面のヘラミガキは隙間が大きくなっており、それらの点から、時期は12世紀後半から13世紀前半頃に比定される。(45)は輸入白磁椀で、体部内面には細い凹みの圏線がめぐり、内面および体部外面下半部までは釉を施しているが、体部外面下端部から高台を含む底部外面は露胎であり、回転ケズリの痕跡が残る。高台はやや高い削り出し高台である。時期は11世紀末から12世紀前半頃に比定される。(46)は土師器皿である。体部から口縁の外面は1段凹みのナデであり、口縁部は外傾する端面を持ち三角状を呈する。時期は13世紀前半頃に比定される。(47)は瓦器羽釜である。内面はハケ目調整で羽部は貼り付け成形である。外面には、使用痕と見

られる煤が付着する。端面を持つ羽部の方形状の形状から、13世紀後半から14世紀前葉頃に比定される。

(2) 瓦類 (図 17、図版 7)

瓦類は十四町内の遺構、西側溝、野寺小路川跡などから平安時代前期のものが一定量出土しているが、丸瓦・平瓦が大部分で軒瓦類は非常に少ない。そのうち残存が良好なものを3点図示した。

(48) は、攪乱から出土した複弁蓮華文軒丸瓦である。外区は珠文を配し、界線は2重になる。花卉は復弁であり、間弁を伴う。焼成は比較的良好で焼き締まり、色調は灰褐色を呈する。胎土は小礫が多く混じる。小片であるため特定できないが、同文瓦と考えられるものが西賀茂瓦窯⁷⁾から出土している。平安時代前期であろう。

(49) は新段階井戸 35 の掘形から出土した外区のみ軒丸瓦小片である。外区は外縁部分であり唐草文を配する。焼成はやや甘く、胎土は細かい砂粒が多く混じるが良好である。外区外縁唐草文が類似し、外縁の断面が傾斜縁であること、瓦当外周に範痕が残り、胎土が比較的良好であることから、平城京の 6091 型式⁸⁾と考えている。

(50) は、川跡 2 下層から出土した唐草文軒平瓦であり、外区は二重の凸圈線である。焼成は良好で、胎土は細かい砂粒が混じるが良好である。この軒平瓦は平城京の 6663 型式⁹⁾である。

(3) 石製品 (図 18・19、図版 7)

各時代の遺構から 10 点近く出土した。その内の石器 1 点と砥石 3 点を図示した。

(51) は川跡 45 から出土した先土器時代末から縄文時代草創期のナイフ形石器である。長さ約 6.5 cm、幅約 2 cm、重さ約 7.7 g ある。サヌカイトの横長剥片であり、右側辺は角度の浅い剥離面となりナイフ形の刃部となる。さらに刃部先端と左側面に小さく剥離が施されている。裏面は平坦な剥離面である。エッジなどに若干の磨滅が認められ、剥離面などの痕跡は不明瞭であり流路内でローリングを受けていたものとみられる。上流から流れてきた二次堆積物であろう。¹⁰⁾

(52) は整地土から出土した砥石である。表面は滑らかである。長さ 6 cm 以上、幅約 3.5 cm、厚さ約 1.5 cm あり、断面は台形状である。側面・上面に細かい使用痕がある。(53) は川跡 2 下層か

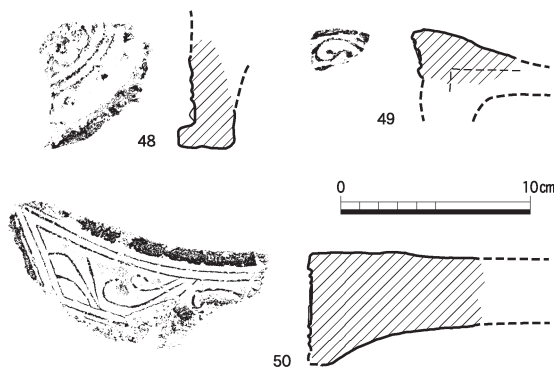


図 17 軒瓦拓影・実測図 (1 : 4)

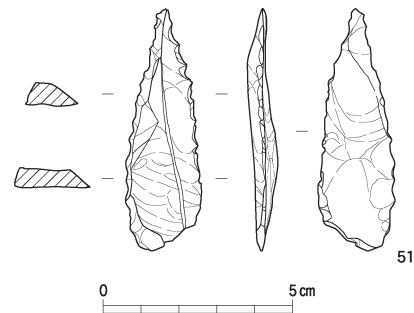


図 18 ナイフ形石器実測図 (1 : 2)

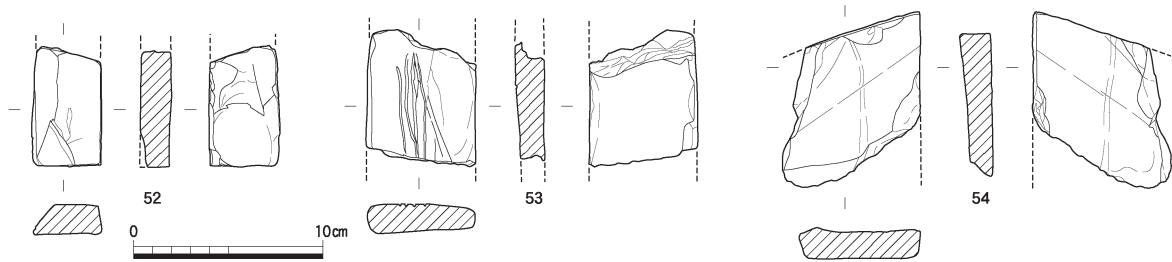


図19 砥石実測図（1：4）

ら出土した砥石である。表面は凹凸が目立つ。長さ7 cm以上、幅約6 cm、厚さ約1.5 cm、断面は隅丸方形である。上面に幅0.1 cm前後の使用痕が6～8本ある。(54)は川跡2下層下部から出土した砥石である。表面はかなり滑らかである。長さ・幅7 cm以上、厚さ約1.5 cmある。形はひし形状で、断面は四角い。窪んだ上面と底面、図の右側面に使用痕がある。砥石の3点は、泥岩などの堆積岩系の石材を用いている

(4) 木製品（図20・21、図版7）

下駄などの生活用具、卒塔婆などの宗教関係品、杭や井戸などの土木関係用材などの各種の木製品が合わせて20数点出土した。そのうち加工痕などの残存状態の良いものと、水利施設50から取り上げた木杭と竹杭を図示して報告しておく。

(55)は川跡2下層から出土した卒塔婆¹¹⁾である。長さ約60 cm、幅約8 cm、厚さ約2 cmある。下端は尖らせ、頭は五輪塔の空輪と風輪を作る。(56)は水利施設50から出土した。上部は欠損しているが、下部は(55)によく類似しており、卒塔婆と考えるものである。長さ57 cm以上、幅約8.5 cm、厚さ約1.5 cmある。(55・56)の表面には文字、絵などは認められなかった。

(57)は川跡2下層から出土した下駄である。長さ約22 cm、幅約10 cm、厚さ約3 cm、鼻緒の穴が2ヶ所残り、前部の鼻緒の周りには指跡らしき痕跡も認められる。

水利施設50から取り上げた(58・59)は木杭、(60)は竹杭である。(58)は長さ82 cm以上、



図20 水利施設50出土木杭

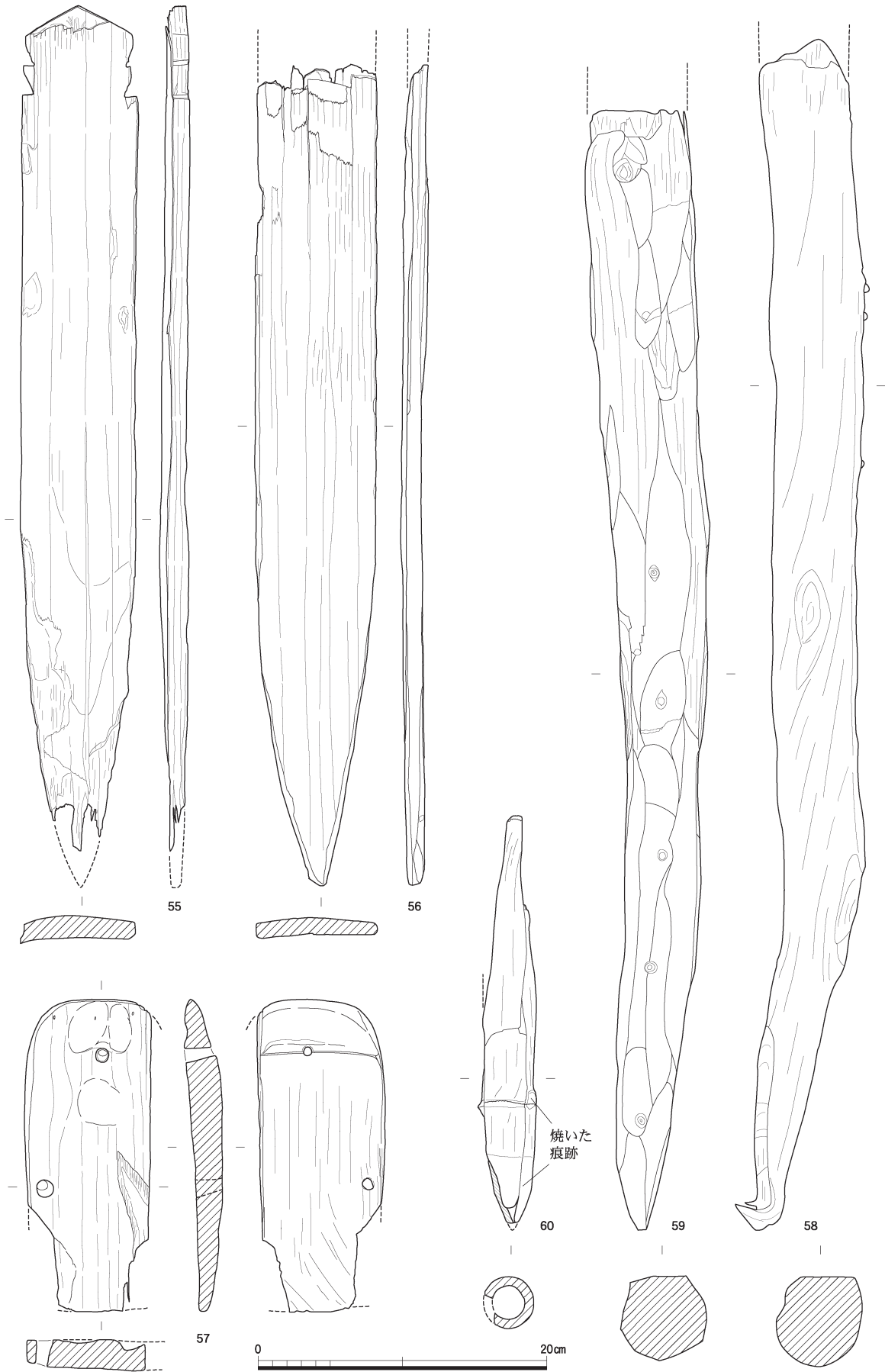


図 21 木製品実測図 (1 : 4)

太さ約6 cmあり、自然木の小枝を落とし、先端を尖らす。(59)は長さ80 cm以上、太さ約8 cmあり、自然木の小枝を落とし、先端を尖らす。(60)は長さ28 cm以上、太さ約4 cmある。先端を尖らし竹槍状になる。また先端部は焼いた痕跡がある。

(5) 金属製品 (図22～24、図版7)

各時代の遺構から5点出土したうち残存が良好な3点を図示した。

(61)は長さ11 cm、幅1 cm前後、厚さ0.5 cm、重さ約20.7 gの鉄釘である。頭は折れ曲がる。整地土から出土した。(62)は長さ約24 cm、幅1～1.5 cm、厚さ約1 cm、重さ153.9 gの鉄釘である。川跡2下層から出土した。

(63)は直径約2 cm、高さ約1 cm、厚さ0.5 mm前後、重さ1.4 gの銅製品の飾り金具である。頭部に輪が付く。整地土から出土した。

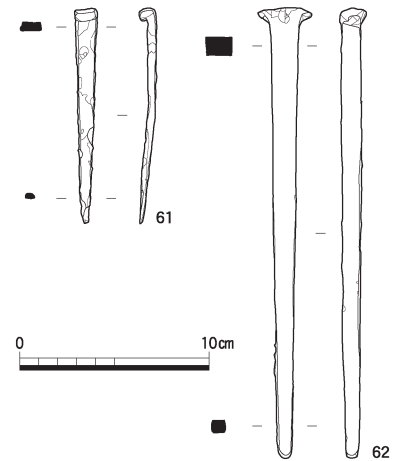


図22 鉄釘実測図(1:4)

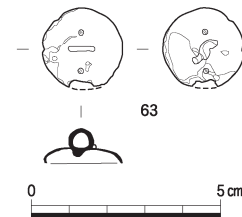


図23 銅製飾り金具実測図(1:2)

(6) その他の遺物 (図版7)

整地土から土錘小片1点、整地土と川跡から骨などが出土した。骨は微小なものも含めて川跡2の埋土にかなり認められた。

(64)は人の大腿骨である。全長約21 cm、径約3 cmあり、青く変色している。骨髄と思われるものを伴う。(65)は動物の骨である。長さ1～5 cm、幅約1 cm、厚さ0.5～1 cm程のもの5片のうち2片である。(66)は牛の下顎骨の付根部分である。長さ約6 cm、幅約5 cm、厚さは0.5～2 cm程である。(66)のみ整地土から出土した。



図24 銅製飾り金具

なお、調査地北隣の1989年度調査(図4-8)で卒塔婆や人骨が出土しており、当調査地からも卒塔婆と人骨などが出土している。このことは、川による遺体処理や川跡2中層・砂礫層の厚い堆積などから考えられる洪水による流入の可能性が考えられる。

5. まとめ

今回の調査では、平安京右京三条二坊十四町東辺（東一行、北五・六門）の平安時代前期から中期初め頃の土地利用と、それ以降の野寺小路の流路化について調査成果があった。以下では、それらについて述べたい。

平安時代前期から中期初頭の遺構

十四町内と野寺小路で検出した遺構は、井戸 35 と柱穴 28、西側溝である。その他の遺構は検出することができなかった。

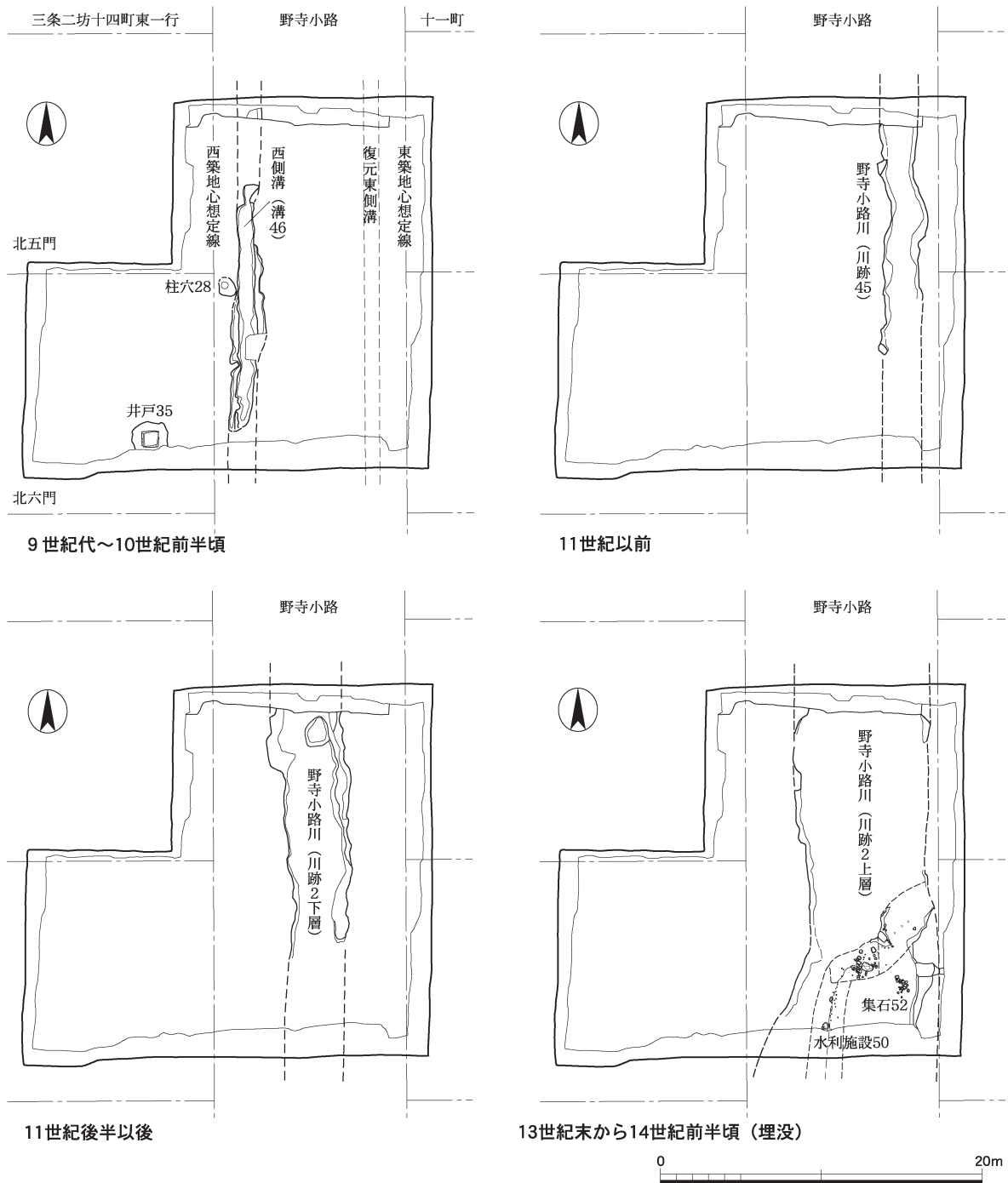


図25 遺構変遷概要図 (1:400)

井戸 35 は、9 世紀半ば頃には形成され、9 世紀末から 10 世紀初め頃に作り直しをへて、10 世紀前半は使用され、10 世紀半ば頃に埋没したと考えられる。この井戸が存在するという事は、この期間を通して宅地としての土地利用がなされていたと考えられる。

柱穴 28 は、9 世紀後半までには形成され、10 世紀頃までには廃絶したと考えられる。この柱穴は、その検出位置から築地に関連する遺構と考えられ、門跡の可能性はある。

野寺小路では、路面などは検出できなかったが、野寺小路西築地心想定線から東へ 2 m 前後に位置して野寺小路西側溝（溝 46）を検出した。出土遺物から、同側溝は平安時代前期には形成されていたと考えられ、10 世紀半ば頃には埋没し機能は失われていたと考えられる。

十四町北西部の 1998 年調査（図 4 - 12）では、A 期（9 世紀中頃）、B 期（9 世紀後半）、C 期（9 世紀後半から 10 世紀前半）の 3 時期にわたる建物跡や作り直された井戸、側溝などを発見している。ここでの宅地的利用は、9 世紀中頃までには始まり、「10 世紀の中頃には人は住まなくなった」という成果を得ている。また今回調査地の北隣、1989 年度調査（図 4 - 8）では、小規模建物跡 1 棟、柵列、野寺小路両側溝などを発見している。これらは平安時代中期までは機能していたと調査成果が得られており、今回の調査成果とほぼ一致する。

今回の調査と既調査の成果から考えられる当調査地を含めた当地付近の十四町の土地利用は、平安時代前期のうちには開始され、10 世紀半ば頃までには廃絶していたと考えられる。宅地割りに関連する明瞭な遺構は、検出できなかった。しかし井戸 35 から出土した須恵器獣脚付円面硯・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器・白色土器などの遺物は、上層階層が使用する土器類の可能性¹²⁾があること、柱穴 28 はその検出位置から二戸主以上に対応する門跡の可能性¹²⁾があること、さらに調査地北西隣の 2002 年度調査（図 4 - 11）では平安時代前期の建物跡と区画施設の柱穴列を発

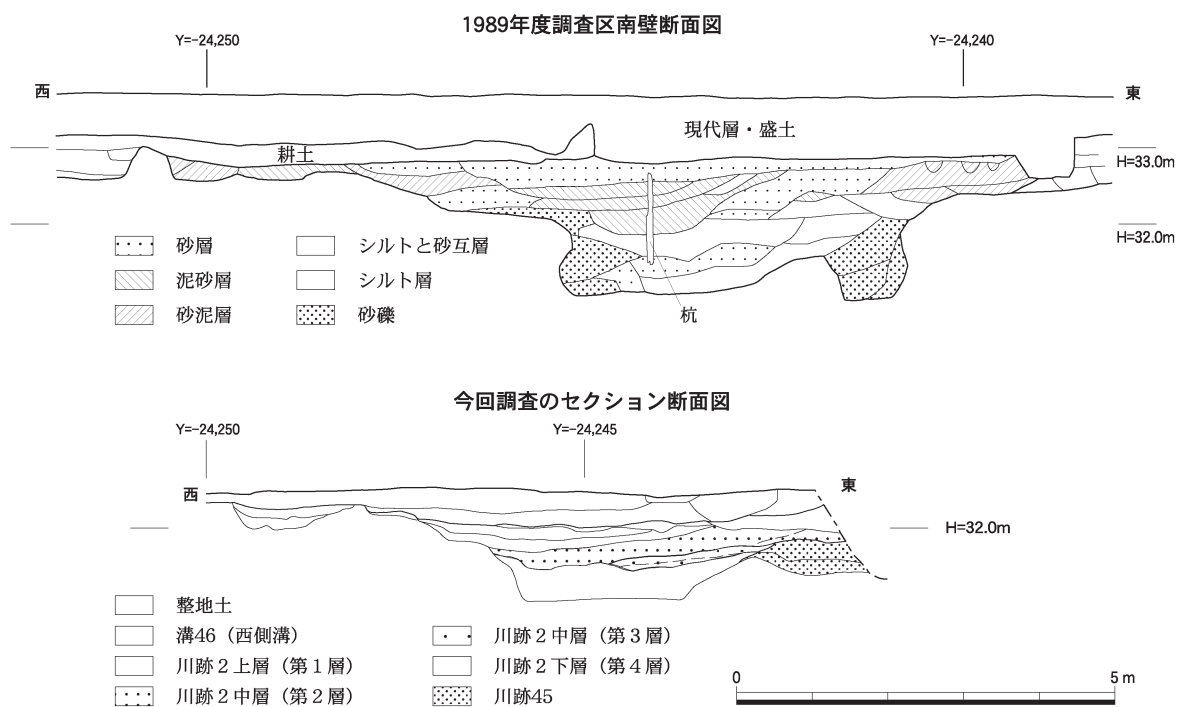


図 26 1989 年度調査と今回調査断面図（1 : 100）

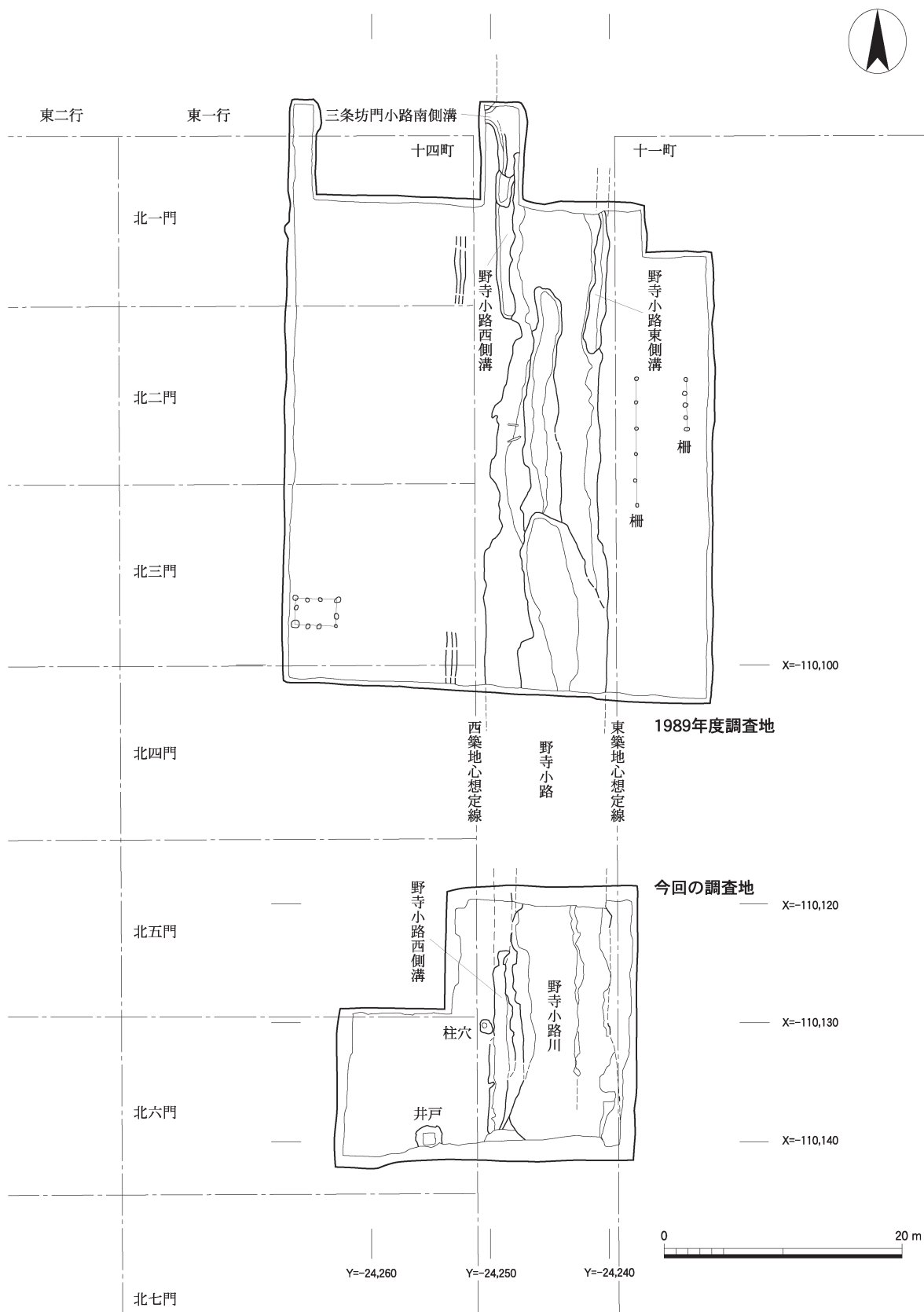


図 27 主要遺構配置図 (1 : 500)

見しており、8分の1の宅地割りが想定されていることなどから、今回の調査地の宅地割りの規模は、一戸主ではない可能性がある。

平安時代中期以降の遺構

野寺小路にあたる位置において、野寺小路川（川跡45と川跡2）を検出した。川跡45は、全く新たに形成されたものであるか、野寺小路東側溝を踏襲して流路化したものか断定できないが、その埋没は11世紀頃と考える。そして川跡45埋没後に川跡2が形成され、13世紀末から14世紀前半頃の間には埋没したと考える。

今回調査地の北隣、前述の1989年度調査（図4-8）でも、野寺小路にあたる位置に幅約9m、深さ約2mを測り、杭による護岸を伴う川跡を検出しており、調査区南壁の断面（図26）観察で川跡45に対応すると思われる埋土が認められることや、野寺小路川が側溝を侵食していること（図27）が認められ、この川跡・野寺小路川は、鎌倉時代から室町時代までには埋没してしまうという調査成果を得ている。これらの調査成果は今回の調査成果と大きく矛盾しない。

井戸35と西側溝（溝46）の廃絶時期や、既述の北隣調査では「平安時代中期までは、道路と側溝は機能していた」という調査成果から、検出できなかった野寺小路路面はおそらく同時期まで機能していたと考えられる。その後10世紀半ば頃には宅地的利用が廃絶し、それ以降に野寺小路内に流路が形成されたと考えられ、川跡45が野寺小路東側溝を踏襲して流路化したものであるとすれば、その形成は宅地的利用が廃絶した以降の早い段階と考えられる。いずれにしても野寺小路川は、川跡45と川跡2の洪水層（川跡2中層）を含む3時期をあわせた、4時期にわたって平安時代中期から機能し、鎌倉時代から室町時代初頭頃までには廃絶したと考えられる。

また既調査成果から、野寺小路川は十四町から十六町にわたり、所々護岸が施され、野寺小路にはほぼ重なる南北方向の直線的な流路であり、そのあり方は人為的に設置された可能性が高いが、川跡45の時期には人為的なものと断定するのは難しい。しかし護岸などのあり方から、少なくとも川跡2成立以降は、人為的に修復がなされ、機能が維持されていたものと考えられる。鎌倉時代前半頃には、川跡2内に水利施設50が構築され、流水を分流する利用が行われるようになる。このことは、川跡周辺の土地利用が流水を利用するものに変化したことと連動すると思われる、土地利用の耕地化が始まったと考える。このように利用が行われていた川跡2も、室町時代初頭頃には完全に埋没し、その上には整地土が形成され、さらに近世から近代へと続く耕土が形成されている。

今回の調査によって、野寺小路川は右京三条二坊十六町から今回の調査地の十四町まで、ほぼ直線的に約240m¹³⁾に及ぶ流路であると明らかにすることができた。しかしこの野寺小路川の南には淳和院があり、右京五条二坊九町・十六町の調査では、野寺小路の両側溝を検出したが、川跡は検出されていない。これらのことから野寺小路川が調査地より南ではどのように流れるか、今後の調査に期待したい。

註

- 1) 表1・図4は、山口 眞『平安京右京三条二坊十三町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-19 2005年に記載の表・図を元に、近年の調査例の補足などを行い、作成した。
- 2) 野寺小路内で発見された川跡の名称については、現在「野寺川」と「野寺小路川」の二通りの使用例がある。当研究所では表1・図4-19『平安京右京三条二坊十五・十六町-「齋宮」の邸宅跡-』報告書以来、「野寺小路川」を使用している。本書ではこれを踏襲し、「野寺小路川」を使用する。
- 3) 表1・図4-19、鈴木廣司他『平安京右京三条二坊十五・十六町-「齋宮」の邸宅跡-』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第21冊 2002年の調査では、十六町の北五門と六門の境で門跡を検出している。
- 4) 出土土器の年代については、小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究-日本律令的土器様式の成立と展開、7～19世紀-』（有）京都編集工房 2005年に準拠した。
- 5) 平安京内での出土例はほとんどないが、丹波篠窯西長尾1号窯に出土例がある（図22-85、図版23-85 石井清司『京都府遺跡調査報告書第2冊』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1984年）。また蹄脚円面硯が中務省跡（『平安京跡発掘料選』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1980年）から出土している。なお平城京などにも出土例がある。（奈良文化財研究所編『古代の陶硯をめぐる諸問題』2003年 独立行政法人 文化財研究所）。
- 6) この種類の土器は、以前には「無釉陶器」「緑釉陶器の素地」として扱われていたが、近年では須恵器として認識するに至っている。（上村憲章「須恵器―須恵器に見る問題点―須恵器の椀と皿」『平安京提要』第4部第2章3 P 734 （財）古代学協会・古代学研究所編 1994年）
- 7) 近藤喬一他『平安京跡研究調査報告第4集 西賀茂瓦窯跡』（財）古代学協会 1978年。図7-7・図版14-4、図39-6・図版62-4と同文と思われる。
- 8) 奈良国立文化財研究所・奈良市教育委員会編『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』奈良市教育委員会 1996年
- 9) 註8に同じ。
- 10) 調査地近辺では中京区西ノ京車坂朱雀第六小学校内からナイフ形石器が出土している。また当調査地北方にあたる中京区西ノ京南上合町で縄文時代早期の遺跡がある。（菅田 薫『先土器・縄文時代』リーフレット京都 No.87 （財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 1996年）
- 11) 類似する形状の卒塔婆が鳥羽離宮跡の調査で出土している。（図版64・65・155 前田義明他『鳥羽離宮跡Ⅰ 金剛心院跡の調査』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第20冊 （財）京都市埋蔵文化財研究所 2002年）
- 12) 註3に同じ。
- 13) 堀 大輔「Ⅳ-1 平安京四条二坊十六町跡」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成17年度』京都市文化市民局 2006年の試掘調査で、今回の調査地より南に位置し、野寺小路川と比定できる川跡を検出した。これを含めば川跡は、南北約450mとなる。
- 14) 定森秀夫他『京都文化博物館調査研究報告第7集 平安京右京五条二坊九町・十六町』京都府京都文化博物館 1991年

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうさんじょうにぼうじゅうよんちょうあと							
書名	平安京右京三条二坊十四町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2006-1							
編著者名	布川豊治							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2006年6月16日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょう 平安京右京 さんじょうにぼう 三条二坊 じゅうよんちょうあと 十四町跡	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 にしのかょうしもあいちょう 西ノ京下合町 20・21・22番	26100		35度 00分 25秒	135度 44分 03秒	2006年2月 10日～2006 年4月1日	489㎡	共同住宅 新築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京右京 三条二坊 十四町跡	都城跡	先土器時代～ 縄文時代草創期		ナイフ形石器		石器は二次堆積物 である		
		平安時代前期 ～中期	野寺小路西側溝、 井戸、柱穴、	土師器、須恵器、緑釉 陶器、灰釉陶器、黒色 土器、白色土器、輸入 陶磁器、瓦類、軒瓦		井戸は作り直しがある		
		平安時代中期 ～鎌倉時代	野寺小路川跡、水 利施設、集石	土師器、須恵器、瓦器 輸入陶磁器、砥石、釘、 木製品、金属製品、骨		野寺小路川跡内には 水利施設がある		
		室町時代 ～江戸時代	土壙	土師器、焼締陶器、瓦 類、金属製品、木製品、 骨		土壙は主に土取跡 である		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-1
平安京右京三条二坊十四町跡

発行日 2006年6月16日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
住所 〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961